

OCUAC

No. 4 5

大阪市立大学山岳会会報 2007. 12. 17

目次

Mt. Mckinley 空からの訪問	広谷 光一郎	2 頁
中田切川本谷——不登記	伴 明	3～4
秀峰荒島岳	上田 忠士	4
上高地 明神池	中村 光伸	5
富士山トレーニング	大島 一恭	6
クウンブの風に吹かれて	川勝 弘一	7～8
アイランドピークとエヴェレスト街道トレッキング	大島 一恭	9～12
初めての海外登山	兵頭 渉	13～14
トレッキングに於ける医学的報告	山辻 英也	15～17
同上 付属データ（ページに差込）		
ランタン トレック日記	兵頭 渉	18～23
2007 年秋 ヒマヤ・トレッキング	藤井 陽介	24～26
三島 義彦氏を偲ぶ	藤本 勇	27～28
鷺田 英毅さん さようなら	上田 忠士	29
雪線 10 周年行事報告	中島 信正	30～31
写真集		32～33

Mt. McKinley 空からの訪問

広谷 光一郎

2005年7月18日、私は、一度は見ておきたかったK2に行くため、14:10パキスタン航空の機上の人となった。

一緒だったのはACの仲間のDr. 長尾 遼夫であった。

以下、Dr. 長尾の報告(成田空港を離陸、約1時間後、何等不調の病状もなく、突然、左上肢、下肢麻痺を発症した。

給油のため着陸した北京空港で航空機を下り、空港救護室から救急車でSOS international* を経由して、中日友好病院に入院した。)

病院では直ちにCT、血栓溶解剤入点滴など、発症より約3時間半経過していた。尚、中日友好病院の張医師の診断によると「急性脳梗塞」とあった。7月20日、左手足ほとんど機能回復。7月21日、ストックを持ち、歩行可能となる。7月25日SOS internationalのDr. 付添にて帰国、都立荏原病院に入る。検査の結果、頭部MRIではあらたな脳血管障害を認めず、陈旧性脳梗塞と診断された。8月1日退院、以降3〜4ヶ月に1回、検査を受けた。2006年9月の最終検査で何れの痕跡もなく、正常とのことであった。

1年以上、自重を重ね、山に行くのは休んでいたが、徐々にどこかへ行きたいという思いが湧いてきて、2007年6月にアラスカの最高峰McKinley (6187m)に行く計画を立てた。

それは、エベレスト登山時、親しかった植村直己氏の眠る山であり、また2006年9月、思いを共にしていた中学校時代からの親友、稲垣信夫氏が急に亡くなられたことに起因したのでした。

2007年6月19日成田出発、サンフランシスコ、シアトル経由アンカレッジについたのは、6月20日であった。

途中、シアトルの美しいレーニア山(4392m)を間近に見ることができたし、またアンカレッジまでの3時間のフライト中は、眼下にロッキー山脈の山々、氷河など見下ろすことができたが、中でもいくつかの日本隊がトライした Mt. Logan (6050m) は、圧巻であった。

昨今では、一寸寂れた感じがするアンカレッジから、車でデナリ国立公園に入り、カリブー(Caribou)やムース(Moose)、シープ(Dall, Sheep)そして

ベア(Grizzlybear)など野生の動物達を近くで観察することができた。

晴天を待ちきれず、デナリ、ビジターセンターより車で約20分走った所にあるCartwell空港より、念願のマッキンリーのフライトを決行した。双発のセスナでも6200mの頂上付近をフライトすることは、乗員を少なくして、大変な努力が必要らしい。機乗すると、まずは防寒具を整える。ヘッドホーンをつける。酸素マスクを装着することから始まる。

準備完了して機は離陸し、少しずつ高度を上げ、Rutb Glacierを北上、植村直己氏がスタートとしたMountain Houseがあり、氷河を見ながらMt. Silverthroneを廻り込んで、約30分後、Mt. McKinleyの裏側より高度を上げ、あっと言う間に頂上付近に到達したが、気圧の変化でセスナは揺れに揺れ、写真を撮影するにも苦勞させられた。

頂上付近では鎮魂の意を込めて、デナリの野で摘んだ草花の束を投下し、彼等の冥福を祈った。機は一路Mt. Forakerを廻り込んで、Mt. Hunterより、Tbkosima Glacierを真下に見下ろしながら一挙に空港に向って下降した。約1時間15分ばかりのフライトではあったが、思い続けた夢が叶った満足な旅であった。
(俯瞰図は巻末)

* 注) インターナショナルSOSは、医療サービスを通じて適切なソリューションを届けるシステムで、今回は海外旅行保険に入っていた関係で、北京空港より直ちに医療サービスを受けることができた。

アジア全体にネットワークがあるので、チェックしておく役立つ。

<インターナショナルSOSの会社概要>

社 名 インターナショナルSOSジャパン(株)

英文商号 International SOS Japan Ltd.

代表者 代表取締役ローレン・サボリン

所在地 〒102-0074 東京都千代田

区九段南3-9-14 九段南C&Mビル8階

連絡先 TEL 03-5213-9011

Fax 03-5213-9022

中田切川本谷——不登記

伴 明

期日 : 2007年8月16日-19日
メンバー : 山田裕敏、武部秀夫、伴 明

3級上の中田切川本谷を遡行して空木岳頂上に立つことが目的だったのに、核心部の大滝の高巻きをクリアできず戻ってきてしまった。

が、ヒマラヤなどの高所登山とはまったく違う日本の沢登りの面白さ怖さが味わえて、テッペンには登れなかったけれども山の中をたっぷりうろつくことができた。失敗しても、それなりの充実感を得られる日本の沢登りはとても奥が深いと思う。これまでの沢登りで途中引き返したのは降雨による赤石沢だけなので、ここはそのうち I SHALL RETURN. のつもり。

8月16日晴れ、夕刻1時間雷雨

武部の4WD車で光前寺裏の山小屋「雪線」を出発、養命酒工場方面に進み途中で中田切林道に入って終点の大堰堤工事現場に駐車した。11年前に片岡と大荒井沢を登った時よりずっと沢奥まで舗装道路が通じておりアプローチが便利になっている。

9時10分遡行開始する。石が大きくごろごろしており河原状で水量も豊富だが、あまりこれといった特徴のない沢が長く続く。右岸の支沢を一本越えてから煙りの滝のゴルジュを右岸より高巻いて滝上に出る。1時間ほどで大荒井沢との合流点を過ぎ、しばらくして20mの燕滝があらわれ右岸を高巻く。3時頃左岸に適当な平坦地が見つかったのでタープを張る。焚き火をして食事も終えた頃から夕立が始まり約1時間強雨が続き、見る間にタープの周りは幾条もの小川が流れ、本流はキバを剥いた白竜と化した。

終点の大堰堤 9:10 - 右岸支流 10:00 - 煙の滝上 10:40 -
大荒井沢出合 11:35 - 燕滝 13:35
- テントサイト 15:00

8月17日晴れたり曇ったり

6時半頃出発し、大まかな石がごろごろしている沢をひたすら登る。3ヶ所ショルダ

ーで大岩を乗っ越し、3時間ぐらいで大滝の手前に着いた。沢の中で雪渓が大きく割れており、大滝と両側の岩壁から2-3ヶ所水がほとぼしりながら落ち、急なガレ場のある荒れた感じのするところだった。大滝の周辺、両側の岩壁いずれもルートはまったくとれず、「関東周辺の沢」の記述通り大滝手前100mぐらい左にある急で細いルンゼに入る。空滝状の岩場を2ピッチほど登った所で枝分かれしているルンゼの右側のルートをとった。幅1-2mぐらいの急峻な溝状のルンゼが少し曲がりながら上に伸びており、ビレー点がないので3人各々間隔をあけながらフリーで登ったが岩がもろく小さい落石がひんぴんと起こってヘルメットや手足に当たる。分岐点から50mばかり上がったところでトップの山田がルンゼの中の草付き部分を苦闘するも、クリアできずに諦めて分岐点まで戻った。あらためて元のルンゼを直登するが、やはり

ビレー点なく岩はもろく、次第に急傾斜の草付きになってゆき細い数本の草をたばねて掴んでジワーっとずりあがる。最後は伴と、ザイルを付けた武部が交代して、上部の松の木にビレーをとってこの草付きルンゼをクリアした。山田は下でビレーピンなしでルンゼの壁に両足をつっぱり武部を確保していたが、3人とも冷や汗をたっぷりかかされた。この高さ150-200mほどのルンゼの終点は、大滝のはるか右岸側の岩塊と沢の入り組んだ急な山肌から降りているリッジに突き上げており、リッジの向こうは燕沢の上部とおぼしき広い沢が見渡せた。大滝の上部に出るはずの高巻きルートがよくわからない。ともかく笹などのブッシュや灌木、松、樅などの茂った尾根筋を右上に登る。岩塊状の岩壁の下で行き止まり、尾根筋を右下に離れてブッシュを漕ぎ沢を2本渡ってより大滝に近そうな尾根上に出たが、まだ大滝の上部どころか大滝そのものが見えない。この尾根にザックを置いて、尾根を下ったり尾根の北側の沢を少しおりて偵察したが、夕刻となったのでビバークすることにした。

雨が降らず、木の根枕に峰の月の快適なビバークだったが、食料と水が切れてしまった。

テントサイト 7:00 - 大滝手前のルンゼ
10:00 - ルンゼ終点のリッジ
12:00 - 岩塊下 14:00 - 尾根上
16:00

8月18日 晴れ

尾根の北側の沢を下ると大滝の上部に出られそうだが、「関東周辺の沢」記述の「ザレた壁を20mの懸垂下降で・・・」というザレた壁がない。ともかくザイル40m一杯出してこの沢を降りてみたが、ビレーできそうな樺の木らしき所から沢は急傾斜になり、その先が降りられるかどうか不明。尾根に登り直し、もと来たルートを引き返すことにした。ルンゼ終点のリッジまで戻り、ルンゼを降りずにリッジの反対側の燕沢上部とおぼしき沢へ下降するが、急な草付きとザレ場がやばい。雪溪の残る沢へ降り立ち水をがぶ飲みする。

へとへとになってルンゼ終点のリッジまで登り返す。登る時に散々苦勞したルンゼを降りるのはいやだが他にルートはない。リッジから40mザイルにさらに沢を下っていくと下降不能な滝に出会い、燕沢上部どころか、本谷よりの支沢に迷いこんだことに気付かされた。10mの補助ザイルをつないでどうにかルンゼの中ほどに降り、さらに2回懸垂下降して大滝手前の本谷に降りた。来た時に泊まった沢筋のテントサイトですきっ腹をかかえながら寝た。

尾根上のビバーク地点 7:00 - 沢下降後
ビバーク地点へ戻る 9:00 -
ルンゼ終点リッジ 10:30 - 間違った支
沢往復しリッジへ戻る 14:00
ルンゼ下本谷 16:00 - テントサイト
18:00

8月19日 晴れ

テントサイト発 7:00 - 大堰堤 12:00
にて終了。

秀峰 荒島岳 (1524m)

上田 忠士

メンバー：佐々木惣四郎、上田忠士、佐野和美
(友人)

コースタイム：9/1：西勝原の民宿泊まり。

9/2：勝原コース登山口 6:30 - 上部リフト 7:20 - シャクナゲ平 8:40 - 頂上 (9:40~10:00)
- シャクナゲ平 10:40 - 登山口下山 12:30

福井県は山岳というイメージが湧かないが、秀麗な独立峰があるというので初秋に出かけた。

深田久弥が日本百名山に選んだ荒島岳である。この山の登山コースは北西からの中出コースなど3本あるが我々は勝原スキー場を登山口とする勝原コースを取った。スキー場滑走スロープ左側に登山道があり、20分ぐらい登って右に屈曲してしばらく登ると、小雨が降ってきた。

佐々木君が「引き返して天候の様子を見ないか」と言ってる間に小ぶりになり、10分も歩かないうちにスキー場上部に出る。ここからはブナの多い樹林帯を進む。登山道はよく整備されているが、階段が多く急登もあり、単調な登りで視界もない。

佐野さんの左の登山靴のゴム底が外れてきて、紐で応急処置をして進む。やがて中出コースからの合流点シャクナゲ平に到着。小休止のあと頂上に向う。「もちが壁」という急登もあるが、まったく問題なく頂上に到着。頂上は広く、民宿の娘さんはここで結婚式を挙げたとのことである。今日は視界100mのガスの中で我々3人だけの空間だ。独立峰なので絶景を楽しみにしていたのに残念だ。20分ぐらい滞在しサブエッセンをとって、登って来たコースを下ったが、途中から青空も見え視界が開けてくる。広大で実り豊かな田園風景が望まれ心身ともに癒される。佐野さんの左の登山靴のゴム底は完全に剥離、今度は右側が外れてくる。左右同時とは珍しい。接着力が弱いのだ。まだゴム底はほとんど磨耗してないのに、このイタリヤ製は良くない。私は国産品を長年愛用しているが……満足しているなどと話している内に登山口に到着。時間が早いので九頭竜温泉に浸かり、大阪に向った。

上高地 明神池

中村 光伸

上高地に4時間滞在できるバス旅行のプランを、妻が旅行案内より見付けたので申込みました。会員の皆様方が海外登山をされているのを羨ましく思い乍ら、月に1回ウォーキングに出かけるのが精一杯のところでした。

最近、磐座（イワクラ）と言うものに興味を持ちまして、その探訪を兼ねて山の辺の道などの古社寺巡りをしております。縄文・弥生の聖地から神道・佛教・佛像・古代史はては万葉集まで興味が広がり、古本市で古書などを買いこんでは読んだりしております。

さて本題の明神池ですが、昭和31年7月夏山合宿ではじめて上高地に来ましたが、いつも明神は素通りで徳沢に向かいましたので、51年ぶりに穂高神社の奥宮に参拝してきました。

10月8日 体育の日は雨。

乗鞍スカイラインは進入禁止で紅葉は見られませんでした。宿の人によると穂高神社の御船祭も吹き降りで散々だったようです。

10月9日 新しい広い釜トンネルを抜けて9時45分上高地バスターミナル着。

雨が降っている。ガスで煙る岳沢を見上げて河童橋を渡る。梓川の右岸の針葉樹林の中を上流へ傘をさして歩く。雨の所為か水勢の強い清冽な流れを何ヶ所か渡る。太い

幹のダケカンバを見つけて、その横で妻に写真を撮ってもらった。梓川の川原へ出たところで小休止。

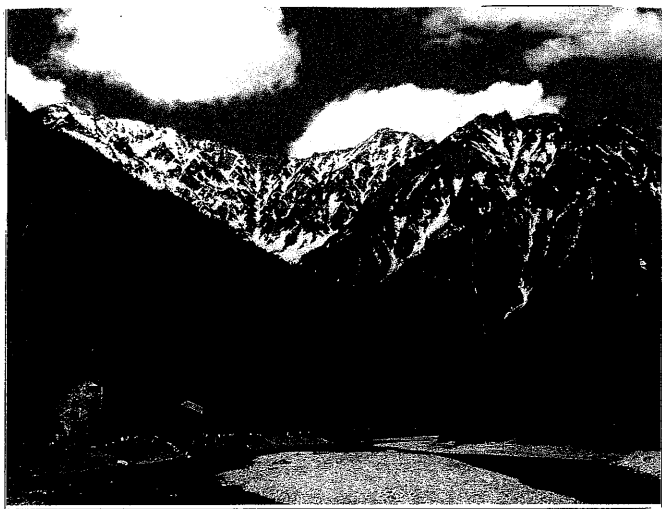
再び樹林の中に入っていくと橋に出て明神着。雨も上がる。先ず小さな社殿に参拝

し左側から明神池に入る。栈橋があり竜頭ゲキ首の二艘の舟が浮かんでいる。広々と静かに水面が横たわる。この池こそが穂高神社のご神体そのものにちがいない。次に二の池に行く。こちらは複雑な形をしている。奥へ奥へと行くと川となって流れ出てゆく。

引き返して梓川の土手で昼食。橋を渡ると目の前に明神岳が頂上まで聳えている。明神館より上高地バスターミナルへ引き返す。

河童橋に来ると吊り尾根まで雲が晴れて西穂から前穂までバッチリ見える。わずかに奥穂にガスがかかっている。カメラをとりだして何枚も撮る。

1時45分バスターミナル発車。帝国ホテルあたりで後をふりかえると、穂高の稜線は雲一つなく晴れ上がっていた。



富士山トレーニング

大島一恭

今秋のネパールトレッキング行の為、高所順応を目的として、2回の富士山登山を実施した。

1. 9/7 (金) ~ 9 (日) : 頂上1泊
参加者 : 山辻、上堂、伴、佐々木、山田、
島川、兵頭、大島。(現役) 和田、
近藤、藤井。(賛助会員) 柴原

7日深夜、大阪・京都・東京より車3台にて水ヶ塚公園に集合、既に兵頭・柴原が大テントを張って待っていてくれる、東京は近い。軽い酒盛りの後早々に就寝。相も変わらず暴走族が煩わしい。

8日(曇り)朝、ピスタリ組(山辻、上堂、島川;新五合まで車、標高差1300mを登る)と公園発組(残り;標高差2400mを登る)に別れ頂上での再会を約し出発。テント他重装備は佐々木・兵頭・現役が担う。深い原生林の中を黙々と歩む。森林限界を抜け出る(御殿庭)のに約2時間、第3・第2宝永火口を経て富士宮ルートの出会い(六合)まで更に2時間要した。六合目の小屋のみ開いており、水も売っている。昼食とする。

七合目、元八合目、新八合目、九合目、九合半目と休憩適時に小屋は有ったが全て閉まっていた。九合目より強い吐き気に襲われる(高山病?)。頂上富士宮前の3張りのテントに全員収まる。10年前は食欲も無くなり夕食が食べられなかったが今回は山辻Drの薬にて回復、他には高山病の症状を訴える人はいなかった。

9日(曇り)小屋は閉まってるのに沢山の人が登ってきている、何処に泊まったのか?お鉢周り組(現役他)と直下山組に別れ、出発。途中時々晴れ間より上りし方を眺める、公園から六合までの距離に驚く。新五合の駐車場に置いた車にてピストン、昼前に水ヶ塚公園に再集合。御胎内温泉にて汗を流し昼食、1500円と高いが富士山を眺めながら入れるので良しとすべき?解散。

2. 9/14 (金) ~ 15 (土) : 日帰り
参加者 : 伴、佐々木、山田、兵頭、
大島。(現役) 松本

14日深夜、大阪・東京より車2台にて水ヶ塚公園に再び集合、今回は人数も少なく小テントが待っていた。

15日(小雨・ガス)新五合まで車、富士宮ルルート標高差1300mの往復とする。

六合目の小屋はまだ開いていた。かなりのハイペースで高度を稼ぐが、これが災いして山田氏が過呼吸で戦線離脱!!皆さん元気すぎるのでは……。頂上近く晴れ間も出てきて剣が峰からお鉢が良く見える。風が強く寒い、お宮で待っていた佐々木氏は震えが止まらない模様。即下山。14時には水ヶ塚公園に集合。佐々木・大島・松本は風呂に入らず即帰阪とする。伴・山田は兵頭車にて東京へ。

クウンブの風に吹かれて

川 勝 弘

10月7日 約2週間のヒマラヤトレッキングから帰り、どうやら乱れていた体調も元に復した頃、11月2日のヒュッテ雪線秋の行事に参加した。

2日に 近くのゴルフ場でコンペの最中に妻から緊急電話が入り、昨日大先輩の三島義彦氏が死去され、ご長男から至急に連絡がほしいとのこと。予想もしていず しかもゴルフのプレー中のことでもあり、全く慌ててしまった。予定を繰り上げ11月3日の朝 橋本、小笹両氏と急遽帰京する。 同日夕のお通夜、4日のご葬儀と多くのOBと共に、お参りさせていただいた。

91歳の高齢にも拘わらず お顔はふっくらとして眠っておられる様な風で、拝んでいる小生も何かほっとする思いであった。

振りかえれば 先輩の経歴は、戦前的大阪商科大学山岳部の黄金時代をリードされ、我々後輩にとっては三島氏の名前が出れば、

「ああ あの前穂高東壁の三島さん」といふ程英雄的存在であった。 奇しくも 小生がヒュッテ雪線より帰る前日の11月2日に銅板碑がヒュッテ土台のコンクリート側壁に貼り付け作業が完了していた。この銅板碑は、上高地梓川畔より出水による流出を恐れて、このヒュッテに保存されてあった。そこに彫られた名前のメンバーは、銅板会と称し大阪商大山岳部OBの中核メンバーを中心として、交流のあった、主として 関西の大学山岳部OBのインターカレッジの会であった。三島氏はこのメンバーの数少ない生き残りでもある。

ここに謹んでご冥福をお祈りさせていただきます。

戦前に ヒマラヤ遠征を夢見て果たせなかった三島氏への追悼の思いを冒頭に置いて、ここにヒマラヤトレッキングの記録を記すことになったのも、何かの因縁かといふ思いもいたします。

今年のポストモンスーンのヒマラヤ行は、山辻、伴、佐々木諸氏のベテラン組と、ヒマラヤ初経験の4人を交えたOBと現役1名に

よる9名のメンバー構成になった。但し 小生を除く8名はいずれも来年以降の遠征へ繋げて行こうとの意志を持ったわが山岳会の精鋭メンバーである。

小生については年齢も70歳を超え、このメンバーの足手まといにならないよう、この目でエヴェレストを見たさに付いていったような存在であった。従って 仕事の都合と体力の限界も考えて、9月22日に皆さんと一緒に関空を出発したものの、約2週間後10月7日にメンバーでは一番早く帰国した。

従って Imja Khola 最後の部落 Chhukhung で10月1日に Island Peak の Base Camp へ登る他の隊員と別れて、以後はシェルパとポーター3人で Lukla 目指して下山にかかった。ちょうどモンスーンの影響が9月30日まできっちりと 殆ど毎日しかも終日雨降りて往路登りは傘をてばなすことができなかった。

しかし小生が 他の隊員と別れた10月1日からは、毎日晴天で 下山の行程はシェルパのドルチエ君と2人でのんびりと周囲の山々や高山植物をカメラに収めながらの旅になった。Chhukhung を出発、Dingboche を経由して、途中往路に通った Pangboche への分かれ道を右に見て、Imja Khola の鉄製の橋を渡って Tengboche (3,860m) への道を登る。往路もそうであったが、このコースは、等高線沿ひに歩いている時は、ほぼ3500m前後を上り下りするものの、ひと度大きな渓谷を横断する時には600~700mを上り下りしなければならず、この高度からして、小生にはかなりきつい arbeit を強いられる。

Tengboche は Thamseruku (6,608m) から連なる主稜から Imja Khola へ張り出した支尾根の末端に位置する。周囲は針葉樹と広葉樹との混交林に囲まれた台地に壮大なまたカラフルなラマ教寺院が建っている。

10月2日早朝にこの寺院の前の広場へ行ってみると、雲ひとつない真っ青な天空の下に、今登り始めた朝日を浴びて輝く山々を360度ぐるりと見回すことができる。豪華な舞台

エヴェレスト、ロツツエ、ヌプツエ、から始まって、アマダブラム、トラムセルク、コンデetc名も判らない6000~7000mの高峰をずらりと見渡すことができる。

さすがヒマラヤの高峰を神々の居ますところと崇める人々が、立派な寺院をこんな僻地に苦勞して建てた理由が判るような気がする。折から近所のlodgeから、やはりこの絶景を鑑賞しようと欧米人、アジア人たちが、ここそこ集まってワイワイガヤガヤとやっている。ここから直ぐ600mばかり下りにかかりImja kholaにかかる木の橋を渡って500mばかり登って等高線沿ひにNamche Bazarを目指す。この渡った橋はまだ出来上がったばかりで、大工がトンカチやっている横を渡ってきた。Chhulungではこの橋が大水で流されたので、復旧が小生の下山に間に合うかどうかについての情報を取るのに苦勞する。結局橋は復旧が出来たとのことでTembocheへのルートをとることに決定。お蔭で1日得をする。しかし明日のLuklaからKathmanduへの航空便の事も考えて登山客でゴった返すNamche Bazarを通過し、Dudhkosi本流沿ひのMonjuまで足を伸ばす。ここは往路に昼食のため立ち寄っているので様子は判っている。しかしNamche Bazarの人混みに比べてここは距離的に中途半端なのか、かなりの部屋数を持っているのに、泊り客は単独行のイギリス人と小生の2人のみ。夕食の時徒然に彼と話していると、シェルパもポーターもなしで来ているらしい。どこかえ登るのかと問うと、Ama Dablam(6812m)に登ると言ふ。東側からかかると東側はeasyだ自分は西側から登ると言ふ。西面は我々がDingbocheやChhukungから眺めたあの鏡のような氷壁のことだ。確かに小生が見上げるような大男ではあったが、世の中にはすごい登山家もいるものだと呆れてしまふ。エヴェレストはと話をむけるとあんな人が沢山登る山には興味はないとの返事。下手な英語と話の内容について行けないので早々に自室へ引き上げる。

10月3日は、Dudhkosi沿ひにかなりのupdownに喘ぎながら、Luklaへと急ぐ。ちょうどLuklaの北の門に入って200mばかり進んで商店の家

並みが始まるあたりでシェルパのドルチエ君が早くここを通過しようと変に緊張した表情でせかせる。今まで のんびりと歩いて来たので、不思議に思って 一体どうしたんだと小声で聞くと、彼も同じく小声で「あそこにマオイストのチェックポストがある」と言ふ。いよいよ人通りも多くなる街中へ入ったら、行く手の建物から ひょっこり迷彩服を着た警官だか軍人だかの姿がみえる。小生には何が何だかさっぱり判らなくなった。今年の12月には国会議員の選挙もあり、今のところ王政の存続を支持する共産党も含めた七つの政党と王政を否定するマオイストの間にはホットな戦闘はないもの、こんなエヴェレスト街道にまでマオイストの勢力が伸びているのかと驚いてしまふ。昼は政府軍の支配、夜はマオイストの支配と、ヴェトナム戦争当時の南ヴェトナムの様な状態かなあと考える。幸いなことに政府は一つの日本人には理解不可能なところがある。

それにしても Namche Bazarの山岳博物館のある丘を、ぐるりと有刺鉄線と100m置きに小銃を携帯した兵隊が、周囲に警戒の目を配っている哨所の厳重な警護はネパール政府にとってドル箱路線のエヴェレスト街道を、マオイストの影響力から守り抜こうとの意志と解釈していた。しかし街道の最重要拠点であるLuklaに、マオイストがウロウロしている様では、何のための軍隊かと思う。

往路、帰路とも大勢の人々と擦れ違った。欧米人は言ふに及ばず中国、台湾、韓国マレーシア、遠いところではエストニアやチリからきていた。この街道に限らずランタンやアンナプルナの有名街道へ、かくも多くの人々が、続々と押しかけて来るのは、平和であってこそといふ思いを深くする。願わくばネパールの政情が安定して、いつでも誰でも安心してヒマラヤ歩きの出来る状態が続いてくれることを願うばかりの旅でした。

同行の皆さんは いつも遅れて到着する小生によくお付き合いいただき、有難うございました。また 10月末に帰国された佐々木君他の3名のランタン隊もふくめて当初のメンバー全員が無事に帰国できたことは本当に結構なことであつたとぞんじます。

2007 年アイランドピークとエベレスト

街道トレッキング

大島一恭

ポストモンスーンの絶景を期待、やっと定年までこぎつけた数名の夢を乗せて3週間の旅(居残りランタントレッキング組は5週間超)を楽しんできた。前半は未だモンスーンが明けず雨霧の中だったが、後半は好天の中世界一の展望を楽しめた。

参加者:(リーダー) 佐々木、川勝、Dr.山辻、伴、山田、柴原(賛助会員)、大島、兵頭、藤井(現役) 計9名。

行動記録

9/22(土):9:30 関空集合 11:45 タイ航空にて出発。

9/23(日):10:40 バンコク・12:45 カトマンズ「チベットゲストハウス」泊

査証を現地取得とした為入国に手間取る。アイランドトレッキング社(旅行代理店)のマイクロバスでタメル地区のホテルに直行、社長のテンディ、サーダ(シェパード)のテンバと顔合わせ、ツアー紹介・スケジュール確認等行う。その後カトマンズ市内を突っ切り上記社屋訪問、再度ホテルに戻り、近くの日本料理屋ロータスで夕食、その後山道具の不足分の買出し(日本の半額)とレンタルを受ける。尚ネパール製ノースフェイス製品は諸々非常に安い(−30℃対応シュラフが一万円ほど)??市内の排気ガス・砂埃で喉が痛くなる、クラクションの騒音も酷い。

9/24(月) 小雨・雨。6:30 国内空港(国際の横)・7:10 ルクラ(2804m)「ナマステロッジ」

9:00-13:00 パクディン(2610m) 牧場泊。7km。

4時起床、上記マイクロバスで5時ホテル発。テンディは荷物積み込みまで面倒を見てくれる。テンバ同行にて20人乗りの双発機に乗り込む、同席はオーストラリア人。雲の中にて展望無し。山に激突するかのような斜面の滑走路に着陸。次々と4機着陸、即乗客を積んで折り返し帰っていく。傘を差し小雨の中を5分でロッジ、朝食を

取りながらキャラバンの紹介を受ける。シェルパ4名(サーダ=テンバ26才、ダワ39才、ギャルツエン26才、ドルチェ26才)、コック1名、キッチンボーイ4名、ポータ33名の大所帯である。雨具を着る程の雨でもなく、サブザックに傘のいでたちでダラダラ下りの道を歩き出す。タドコシ村まで降り早い昼食。ドード・コシ川沿いに緩い登りでパクディン村に着き、吊橋を渡ってロッジのレストランに入ると同時に本格的な雨となる。ビールを飲んでいる間に横の牧場に赤いテントが5つ張られ、2名づつにて余裕のある寝室となる。夕食はレストランで味噌汁と和風ダルバート(これが3週間続く事となる、中身は1皿にご飯、毎日味が変るソーセージカレー、煮野菜か炒め青菜)お変わり自由。チャンとロキシーで酒盛り。テント設営・飯づくり・ボッカ全てポータ任せのお大尽旅行である。

9/25(火):雨。8:00-10:00 モンジョ(2835m) 昼食 11:15-12:10 二股-13:30 ナムチェ・バザール(3440m)「シェルパガイドロッジ」泊。10km。

6時半モーニングティーとお湯入り洗面器が持って来られ起床。ロッジで朝食はおかゆとパンと卵料理と野菜(これも3週間似た様な物)。雨具を着て出発、モンジョまで川に沿って緩い登り。松が多く、石積で区切られた畑にはトウモロコシ・インゲン・ニンジン・キャベツ・青梗菜等が植えられている。村々の限られた平地にはこの様な畑と牧場が広がっており山間部の営みの厳しさを感じさせる。昼食はロッジでジュース(マンゴかレモン)の後スパゲティと野菜炒め(これも3週間似た様な物)、また3本の中国製魔法瓶には紅茶とお湯(コーヒ・ココア用)とミルクが入っており、食事中何時でも出ている。ジョルサレ(国立公園事務所がある)から左岸の川原歩きとなり、二股(2830m)リジャドバルから川を離れナムチェまで急登が始まる。今日は右岸に左岸にと本流の大きなつり橋を4回渡った。石の急な階段をヤクやゾッキョが器用に登り下りするのは驚かされる。(時々落ちるものらしい)。日本も江戸時代の牛方はこの様なものであったかと想像する。連絡不徹底にて先頭集団4人がキャンプ地を探しあぐねてロッジに到着したのは1時間後であった。電気が来ており150Rsで充電できる。夕食まで時間も散策をする。この村は斜面も急で畑は少なく、殆どお店(土産・登山

用具) かロッジ。客も多いのか2軒新築中であった。3Fのツイン部屋が割り当てられる、やはりテントより此方の方が良い。

9/26(水): 小雨・霧。ロッジ(3440m)
8:00-9:00 ジャポチェ 9:30 エベレストビューホテル
(3800m) 10:30-11:50 国立公園博物館(軍基地
内) 12:30 ロッジ昼食(泊)。6km。

今日は高度順応の為エベレストビューホテル往復。村の北の山道を急登、ヤクの寝そべる牧場を横切り、ジャポチェの横の水平道を行く。霧で山が見えず花を見るしかない。結構美しい花々はあるがシェルパに聞いても名前は分からない。エーデルワイスだけは我々でも判る。しらびそ・梅の丈が低くなり、このあたりが森林限界のようである。ホテルで1時間ほどコーヒータムしたが霧(雲)は取れなかった。帰りは村に下ってから博物館に寄る。丘の上の塹壕で守られた軍事基地の中にあり、銃を持った兵士のチェックを受けて入場。晴れてれば此处もビューポイントらしい。ロッジに帰り昼食、昼寝、散策。日本語が流暢なホスト(カジと名乗った)に此处の冬の状況を聞くと、積雪が1~2mとなり殆どの村人(街道沿いの村人も)はカトマンズ方面で越冬し無人の街になると言う。

9/27(木): 晴後曇。ナムチェ 7:50-9:35
キャンゾマ・サナサ(分岐 3600m) 11:20
モンラ峠(4150m) 昼食 12:40-13:30 リバーサイド
(3600m) 14:20 ポルチェ(3810m) 牧場(泊)。
10km。

初めての青空に周辺の山々が眩しい。タムセルク(6608m)、クスムカングル(6369m)、コンデ(6187m)、クンプユリ(5761m)と教わる。タンポチェへのつり橋(ブンキテンガの)が流されたので、ポルチェ泊に変更。ドードコシ川を遥か下に見ながらのトラバース道、途中アマダブラム(6856m)が時々頭を覗かせる。ダケカンバとサルオガセをまとったシラビソの森の中のサナサからタンポチェへの道と別れ、ゴーキョ方面へ分岐する。峠からの下りでは川の断崖の上にポルチェが見える。リバーサイドでゴーキョへの道と別れポルチェへと登る。ゲストハウス横の牧場がテント場。今日の夕食は大きな食堂テント、テーブル・イスもあり、こんな物まで運んできていたのかと

感心する。今後は殆どこのテントで食事をする事になる。

9/28(金): 晴時々曇。ポルチェ 7:30-10:30
パンポチェ(3930m) 昼食 12:30-13:40 二股
(4190m) 14:40 ディンポチェ(4350m)
「ザンバラゲストハウス」横の牧場泊。13km。

村から4000mの峠まで30分程、アマダブラム、カンテガ(6685m)が雲の上に見える。徐々に高度を下げながらパンポチェ(ヒラリーの寄付した小学校がある)の村に入る。村の中の道は判りにくく迷いそうになる。ロッジで昼食後、川沿いに緩い登りを二股で、ペリチェへ向かうエベレスト街道と別れ、直進しディンポチェに入る。ロッジの牧場がテント場。アイランドピーク方面は雲にて見えず。夕食はロッジにて、夜雨強く冷え込む。

9/29(土): 雨・雪。ロッジ 7:20-9:50 ナンカル(5000m) 11:30 ロッジ昼食 12:30-15:00
チュクン(4730m) 牧場泊。ナンカル往復 4km
後、チュクンまで6km。

午前中は高度順応の為ナンカル往復。山辻、兵頭は休養。4500m付近で雨から雪に変わり、すぐ雪道となる、昨夜の雨は此处では雪であった。雪にて展望全く無くロッジに戻り昼食。その後チュクンへの谷道を辿るが、小雨にて展望なし。牧場のテント、夕食は食堂テント。ロッジには僧侶が何人かおり、法事を営んでいる模様。深夜、雨が雪に変わる。

9/30(日): 晴後曇。TS 8:00-11:00 チュクンリ(5500m) 12:30 TS。8km。

朝、初めてアマダブラム全容が見える、ローツェ、ローツェシャールも雲の中に顔をだす。午前中は高度順応の為チュクンリ往復。川勝、山辻は休養。絶景を期待したが途中より雲の中となる。右の本当のピークに上るとパーミッション費を取られるので、少し手前で左折する。TSに戻り、昼食の後昼寝タイム。結局此处のロッジは使わなかった。

10/1(月): 快晴。チュクン 8:30-12:10 アイランドピーク B.C(4970m)。8km。

昨日の雪がテントの周りに残っている、寒い。モンスーンがやっと明けた、360度の絶景が広がる。ローツェ南壁に圧倒される。川勝は此処よりタンボチェ経由で下山、ドルチェ同行。山辻は体調保全の為、チュクンのロッジにて我々の下山を待つ。

ヤクガのんびり草を食む平原を過ぎ、モレーン、氷河湖の跡地をトラバースしローツェ、ヌプツェ山群を真正面に見ながらB.C着。昼食後、斜面にザイルを張り、ユマール・エイト環他装備チェック練習。この頃から、伴・大島は暇さえあれば寝てばかりとなる。

10/2(火):快晴。B.C 8:20-10:10 A.C(5600m)。2km。

テントの内張りが凍っている。B.Cには他の隊のテントも何張かあったが、A.Cは我々のテントのみ。大きな岩がごろごろしてる間に整地された所が数箇所ある。そこがテント場。食堂テントは張れず各自のテントで昼食・夕食。食欲なし。

10/3(水):快晴。2:10-アイランドピークアタック-11:00 A.C 12:00-12:40 B.C。2km。

体調悪く、伴2:40(5700m)、柴原・大島5:00(5900m)で登頂断念。

伴の体調;後述。大島の体調;下痢・喉の痛み・息切れ酷く、寝ていても息苦しくて座り込んで深呼吸するような状態、食欲も無く殆ど食べられない。風邪が治りきらず、高度順応に失敗した模様。

佐々木・山田・兵頭・藤井は登頂成功し11:00戻り。

全員揃ってA.C撤収、B.Cに下り昼食。(詳細アイランドピーク登頂記——by兵頭にて)

10/4(木):曇時々晴。B.C(4970m)
8:00-11:00 チュクン(4730m) 11:40-13:40
ディンボチェ(4360m)牧場泊。10km。

チュクンにて山辻Drと再会。山辻は遅れている伴を待つとの事。6名先に下りる。ディンボチェまで下りてくると酸素も濃く息苦しさはなくなる。チュクンの山辻よりトランシーバにて連絡有り、「伴は肺水腫と診断、チュクン泊にて様子見て明日対策」。

10/5(金):ディンボチェにて沈殿。高曇り。

7:00に佐々木ポータ2人連れチュクンへ発つ。11:30に佐々木、山辻、伴歩いて到着。大事に至らなくて良かった。大事を取り明日より山辻・伴は診療所のあるペリチェにて静養、我々の帰りを待つ事になる。山辻Drから各々個人菓を貰う。登頂祝いのケーキが焼かれる、夕食はヤク肉入りのカレー、久しぶりの肉に食欲も戻る。何時も出てくるネパール製のソーセージは非常に不味い。

10/6(土):曇り。8:00-10:10 トウクラ(4620m) 昼食 11:30-12:30 峠(4830m)

13:00-13:50 ロブチェ(4910m)川原にテント泊。8km。

ピッケル他登攀用具をペリチェにデポの為預出する。大島の血中酸素濃度が昨夜の60から90に上昇、ダイアモックスのおかげか?ペリチェに下る山辻・伴・ポータと別れ、展望の良い段丘上を北東に進む。小さな川を渉るとトウクラ(デクラ)、ロッジの外で昼食。タボチェ、チョラツェが背後に聳える。クーンブ氷河末端のモレーンを息を切らせて登ると峠に数多くのチョルテンが並んでいる。これはエベレストで死んだシェルバ達のお墓。氷河の西側の川の右岸を緩い登りでロブチェに着く。河原の草地にテント、ここで始めてトイレ用テントを使う。

10/7(日):晴。7:30-9:00 ロブチェ峠(5110m)・10:00 ゴラクシェブ(5140m) 昼食
10:20-12:30 エベレストB.C手前(5300m) -
14:10 ゴラクシェブT.S泊。11km。

ロブチェのテントサイトは寒かった。ヌプツェ(7861m)が真正面に見える。川の向こうは氷河の上に土が乗っており、雪は見えず一見普通の丘に見える。正面にプモリ(7165m)を見ながら峠を越えチャングリ氷河のモレーンの大岩の間を抜けると白い砂地の広がるゴラクシェブ。ヌプツェの左にエベレスト(8850m)が頭を覗かしている。昼食後低い尾根道をクーンブ氷河の右岸に沿って歩くが何時までたってもヌプツェ・エベレスト方面の景観は変わらないので、適当な所で引き返すことにした。プモリを目指すJACシルバー隊に合う。もときた道に戻る。砂地の上の台地にテントが張られていた。夕日に染まるエベレストが見える。

10/8(月):雪後晴。TS(5140m)3:30-5:00
カラパタール(5550m)6:30-7:30 TS8:30-10:20
ロブチェ12:00 トウクラ昼食13:20 ペリチェ
(4270m) 牧場泊。カラパタール一周4km。
ペリチェまで12km。

昨夜からの雪の中、ヘッドランプを点け出発。
ギャルツェンが左道を取った為急坂と大岩の歩き
悪い道を登る。ケルンが積んである所が頂上と思
い夜明けを待つ、寒い。夜は明けたが雲が多くご
来光は見えなかった。此处はプモリの支尾根にて
岩稜の奥に小屋が見える、あちらが本来の頂上ら
しい。トラバースしてそちらの道を下る。往復で
なく1周した事になる。この頃より晴れだす、プ
モリが大きく見える。TSに戻り、朝食後撤収。
ペリチェへの長い道を下る。トウクラからは段丘
でなく下の川原沿いの道を歩く。山辻・伴と再会。
夕食はヤク肉のステーキ、これは美味かった。

10/9(火):晴。ペリチェ(4270m)7:30-8:00
ペリチェ峠・パンボチェ11:00 デボチェ(3710m)
昼食12:00-12:30 タンボチェ(3860m)13:30-14:00
ブンキテンガ(3250m)14:20-15:10 ロササ(3380
m)。牧場泊。14km。晴れ。

北の奥に朝日の当たる雪山があり、チョオユー
と教えられる。峠から少し降りた二股からパンボ
チェまでは往路通った道、往時は霧で回りが見え
なかったが、本日は絶景、アマダブラムが絶えず
見える。パンボチェから本来のエベレスト街道に
戻り、川を渉り苔の多い森林を抜けデボチェの牧
場で昼食。その後タンボチェに登りゴンバ(寺)見
学、雲間より遠くエベレスト、ローツェの頂が望
める。すれ違うトレッカー、ポータの数も多い。
急坂を下りきり、ブンキテンガで修復された橋を
渡り、森の中を登り返し数軒の茶店のあるロササ
に泊る。

10/10(水):霧曇。7:50-8:20 ゴーキョ分岐・
サナサ・キャンズマ(3550m)10:40 ナムチェ
(3440m) 昼食12:20-13:20 二股(2830m)・マンジ
ョ14:40 チュモア(2680m)。牧場泊。13km。

30分程でゴーキョ分岐、ここから往路通った道
をルクラまで下る事になる。キャンズマの茶店で
休憩土産物購入。ナムチェでは往時と同じロッジ
で昼食、後は延々と下る。マンジョでテントと思
いきや少し先のチュモアのロッジでお茶、牧場に

テントの張られるのを待つ。そのうちゾッキョが
ゾロゾロ入ってきて荷物が降ろされる。ヒマラヤ
ンエキスペディション社の黄色いテントが15も
張られる。イギリス人のトレッカー達が続々と到
着する。食堂テントが張れないのでロッジで食事
する。これまで唯一の水洗トイレがあった。

10/11(木):霧雲後雨。チュモア
(2680m)8:00-8:30 ベンカル(温泉有)9:45 パ
クディン(2610m)11:30 タドコシ(2550m) 昼
食12:10-14:10 ルクラ(2840m)、「ナマステロッ
ジ」泊。11km。

小雨の中を川に沿って下って行く。往時と同じ
ような天気。すれ違うトレッカーの数が少ない、
ひょっとして飛行機が飛んできて無いのではと心
配(当り)。タドコシのロッジで昼食、段々強くな
る雨の中黙々と最後の坂を登る。ルクラ着の途端
土砂降りになる。ロッジの部屋でまどろむ。夕食
はレストランにて鳥の唐揚げ、ケーキと美味しい物
が続く。

10/12(金):霧。ルクラ11:00・カトマンズ
国内空港12:30、チベットゲストハウス泊。

5:00 起床、朝食抜きで6:00 前に空港へ。昨日
は欠航が多く、空港は大変な人出。悪天候にて
6:30 発の飛行機は11:00 となった。本日欠航とな
らずに幸いであった。アイランド社の車に迎えられ、
ホテルで荷を解き、ロータスで朝兼昼食で乾杯す
る。観光、長風呂と各自過ごす。夕食はホテル向
かいのエベレストステーキハウスで肉の塊。

10/13(土):山辻・伴は午後バンコクへ、
14日早朝帰国。佐々木は日本大使館へ。山田・
柴原・兵頭・藤井・大島はタクシーを60\$で雇い
次の各地を観光、スワヤンブナート・ボダナート・
パシュパティナート・バクタブル・パタン。

10/14(日):佐々木・山田・兵頭・藤井は
早朝バスにて出発。ランタントレッキングの後3
0日帰国。柴原・大島はカトマンズ観光。日本料
理店;「タメル地区」おふくろの味・日本の味ふる
里・一太・桃太郎・ロータスは格安で美味。

10/15(月):柴原・大島バンコクへ、16日
早朝帰国。

追記。総歩行距離;約159km、良く歩きました。

初めての海外登山～アイランドピーク6189m～とトレッキング

兵頭 渉

憧れのヒマラヤトレッキングへのチャンスは突然やってきた。

出発までの2ヶ月半、累積獲得標高一万メートル、体重減量3kg、累積歩行距離500Kmを目標にトレーニングプログラムを作成、毎日が日曜日、楽しくケガ無く。

関空・バンコック・カトマンズ＝トリブバン国際空港へ。人、犬、ニワトリ、牛、リキシャ、バイク、自動車、自転車、ヒツジ、が地上でひしめき合い、埃舞い立つ旧市街の路地を抜けホテルへ。過去ヘタタイムスリップしたような、映画の一シーンを観ているような錯覚を覚える。

18人乗りのプロペラ機、操縦室のよく見えるシート、離陸、着陸の際は副操縦士が訓練をかねてスロットルを握っている！手に汗握る飛行一時間でルクラへ。

エベレスト街道は雨の中、ナムチェの登りで大汗かいて、エベレストは霧の彼方のビューホテル、予定のルートは橋流出し坊主峠を越えてゆく。雨と汗とで風邪をひき、高度順化に出遅れてダイアモックスの世話になる。

4500m越えゆくと、大きさ・形それぞれの可憐さ競うエーデルワイスの花の園。いよいよ明日はアタックと、早めにシュラフに潜り込み、グー・スカ・ピー・云々と隣近所を困らせて、夜中に何度もトイレして寝たと思えば朝3時、出発時間と起き出して身支度、腹支度大あわて。

アイランドピークABC(5400m)から山頂(6189m)まで標高差800m、登りは時間あたり150m～200m稼げるとして4時間～5時間、下りは3時間、7～8時間の予定で3時過ぎにヘッドランプの明かりを頼りに登行開始。

岩の小道を辿り、大きなガリーをトラバースし、岩稜を回り込みながら傾斜の強い稜線をユックリと登ってゆく。傾斜が緩みテラス状のところで夜が白みはじめる。先はスノーリッジが雪原に続いている、これからはアイゼンの世界、息を整えながらアイゼンを装着する。氷河の感触を確かめながら300m先に行く仲間との距離をこれ以上広がらないよう少しピッチをあげてみるが無理は禁物だ。

氷河に積もった新雪は意外と柔らかく、傾斜の緩い氷河雪原を大きく右に曲がると雪面のスカイラインに浮かぶ大きな岩の三角錐が見えてくる、マカルー(8475m)だ。ここからは西面が見えるため表情は霞んでいる。朝6時、標高6,000mの雪原は静かに開け始めた。目の前には頂上稜線から降りてくる傾斜60度、登行距離150mの雪壁が左右300mに広がっている。昨日シェルパがセットしたフィックスロープが稜線から真っ直ぐ下りている。気温は低い、強い日射と照り返しで寒さは感じない。

フィックスにユマールをセットして雪壁を登る。見た目以上の傾斜に足下を確認しながら

らキックステップで足場を固めるが、足が思うように上がらない。ステップが大きすぎる！先行者への文句が頭の中を駆け回る。汗はかいていない、息も上がっていない、動悸も激しくない、だけど上に登るのにとても時間がかかる。動作がノロノロし手足に力が入らない。

周囲の山に朝日が差し始める、神々しいほどに輝いている。思い返してみると、立ち止まって写真を撮るという事は考えなかったようだ。頭の回転もノロノロしていたのだろう。雪壁を詰めるとローツエ（8516m）の南壁が視界一杯に広がる。山頂までは両側がすっぱり切れたスノーリッジをフィックスロープにユマールをセットして雲一つない紺碧の空に向かって一歩一歩登ってゆく。

午前7時20分山頂6189mに立つ。ローツエ、ローツエシャール、は近すぎて見上げる先に山頂はるか。少し遠くにマカルーがその存在感あふれる姿を見せてくれる。シェルパ達はカトマンズの家族と携帯電話が繋がり楽しそうに話をしている。山頂で写真を撮り、景色を眺め周囲の山々の名前を確かめたり、楽しい一時を過ごす。

下りは、エイト環を使ってアップザイレンドスピーディーに下る、が、フィックスロープが細いため抵抗が少なくオーバースピード気味で有った。もう少し小振りのエイト環の使用など今後工夫が必要である。ABCで昼食を済ませBCまで下る。薬を飲みながらではあるが4000m越え、6000m越えが出来たことに満足感を覚えた。

エベレスト街道トレッキングに続きランタン溪谷トレッキングを終えて10月末に帰国した。出発の時の暑さが嘘のようで、秋色に染まりはじめる風景を見て35日間の旅の長さを実感した。

今回のトレッキングの個人的目的の一つに高度順化が可能か否かを確認することが有ったが、6000mから7000m付近までは何とかなんと見通しがついた。

それを踏まえて、この様なトレッキングピークだけでなく、自分の登山スタイルとレベルに応じたヒマラヤの峰々にこれから通う事になりそうだ。



アイランドピーク頂上、右後方はアマダブル

赤のチョッキで60歳の誕生日を祝う

2007年9月22日～10月14日

アイランドピーク登頂、エベレスト街道トレッキングに於ける、医学的報告

山辻 英也

- I 高度の及ぼす SpO₂ 血中酸素飽和度 (SpO₂) の変化
- II ダイアモックス (250mg) (アセタゾラシド) による高山病の予防と治療
- III 高山病 (肺水腫) の治療経験

今回、エベレスト街道トレッキングとアイランドピーク (6,189m) 登攀において経験した I、II、III を図表 (1) で報告し、考察を加える。

参加人員	9 人	♂	年齢と内訳	70才～74才	2 人
				60才～67才	6 人
				26才	1 人

I 図表 (1) に 9 人各個人の SpO₂ を測定値標高とともに示した。

- 1) 3,400m ～ 4,300m (行動開始後 3 日間) 8 人の SpO₂ は 80%～90% を示した。1 人は 80% 以下であった。(9 月 28 日発熱、下熱剤を内服した。9 月 30 日平熱にもどり、70%～60% と下がった SpO₂ は風邪症状の為と考える)
- 2) 標高 4,700m (9 月 29 日) ～ 5,400m (10 月 2 日) における SpO₂ は 80%～65% であった。内 2 人は 54%～57% で、60% 以下の値であった。この 2 人は別記により説明を加える。但し⑥で 10 月 1 日 K は下山帰国、以後総数は 8 人となる。
- 3) 更に測定順⑩⑪ (10 月 4 日、10 月 5 日) の如く、標高 4,300m 以下の高度においては、
66% SpO₂ 76% の 1 人を除いて 7 人が 90% 近い値であった。
- 4) 再び高度を上げトレッキングを続けた。高度 4,900m～5,100m の⑫⑬⑭ (10 月 6 日、7 日) で SpO₂ 75%～83% が 5 人、62%～63% が 2 人で再び SpO₂ の低下を認めたが、⑥⑦⑧に比べ⑫⑬⑭の SpO₂ の低下は著明ではなかった。

以上、4,500m ～ 5,000m の高度で明らかな SpO₂ の低下が認められた事を表・グラフとともに説明した。

II ダイアモックスによる高山病予防の効果

9 月 27 日②(3,400m)より 70才、74才の 2 人に対し 1 日 1 錠ダイアモックス 250mg の投与を開始、4,700m に到る。

⑤ 9 月 30 日まで K, Y は表図の如く他の 6 人と同じ SpO₂ の値を示し、年令による差は認めなかった。

又、④ 9 月 29 日で H, O の SpO₂ が 57%～63% であった故に、ダイアモックスの投与を開始。H、⑧ 10 月 1 日チュクン (4,700m) よりダイアモックス服用開始、(1 錠/回、2 回/日)、10 月 3 日、アイランドピーク AC (5,400m) で服用終了。⑩、10 月 5 日、ディンボチェ (4,300m) からダイアモックス服用開始、10 月 8 日、ベリチェ (4,200m) でダイアモックス服用終了、(1 錠/回、1 回/日)。

H, 5,000m⑥に於いて、SpO₂ 69%。O, 4,900m⑨で 62%、特に高山病の症状認めず。B 以外の 4 名〔 (Y) 70才、(K) 74才、(O) 60才、(H) 60才 〕に対する予防投薬は有効であったと考える。

又、別に、Y・Hiro 63才は⑦⑧ (10 月 2 日) 66%、67% の SpO₂ であったが 2 日間内服し (1 錠/日) 5,000m、5,400m の高度で 66% 以下の SpO₂ 低下を認めなかったことを追加する。

これは、登頂前より2日間の内服、予防効果と言えるか？否か？考慮中である。しかし本人は有効であったと報告している。

Ⅲ 高山病（肺水腫）の治療経験

B. 67才. ♂ 発病歴、及び SpO₂ の変化

9月26日 (3,400m) ナムチェ SpO₂ 86%

9月27日 (3,500m) ポルチェ SpO₂ 80%

9月28日 (4,350m) ディンボチェ SpO₂ 82%

9月29日 (4,350m) ディンボチェよりナンガール (5,000m) 往復後、チュクン (4,730m) SpO₂ 55%

9月29日 SpO₂ は 55%に低下したので、又、食欲不振強く、ダイアモックス 250mg 投与開始、(1錠/日 × 10日間の予定)

9月30日 チュクン→ チュクンリ (5,500m) 往復後チュクン (4,730m) にて SpO₂ 63%

10月1日 (5,000m) アイランドピークBCにて SpO₂ 57%

10月2日 (5,400m) アイランドピークACにて SpO₂ 57%

相変わらず食欲不振なるも強い息切れなく倦怠をおしてACまで登る。

10月3日 アイランドピークAC (5,400m) より、6,189mに向かって登高開始するも、登頂不可能を自覚し、再び、ACに帰り、更に他の6人とともにBC (5,000m) へ下山。息切れ苦しくフラフラであったと本人が述べた。BC (5,000m) にて SpO₂ 58%

10月4日 (5,000m) BCよりディンボチェへ下山開始するも、息切れ、ふらつき強く、ヘトヘトで、7割位は独歩、後はシェルパの肩を借りて下山。ディンボチェに到らず、チュクン (4,730m) まで5時間を要した (午後1時10分着)。他のメンバーの所要時間は2時間。チュクン (4,730m) のロッジにて Dr.H と合流。

ディンボチェに持って下ったメディカルボックスを再びチュクンに持ち上げ PM5:30 より加療開始。

血圧 146~80 脈拍 88

胸部喘鳴強く、咳、咽頭痛、強い疲労、息苦しさを訴える。時に起座呼吸をし、SpO₂ 57%、中等度以上の肺水腫と診断。

(A) ダイアモックス 250mg 2錠

プレドニゾロン 5mg 2錠

アントブロン (去痰) 2錠

を投与し、PM6:30 SpO₂ を再検査、47%の低下を示した。直ちにPM6:45 リンデロン 2mg 皮下注射を行った。

安静は勿論のこと、水分補給に努め、時に起座呼吸もあったが PM8:15 に SpO₂ 再測定し 55%と少し上昇したのでそのまま就寝した。

10月5日 朝

AM6:15 前日に続いて2回目の投薬

(A) ダイアモックス 250mg 2錠

プレドニゾロン 5mg 2錠

アントブロン (去痰) 2錠

を行い、リンデロン 2mg 皮下注射を行った。

AM7:00 SpO₂ 60%、血圧 120~80 脈拍 73、呼吸音は軽度ラッセル音あるも喘鳴は軽快、ゆっくりと自力でディンボチェに向かう。昼すぎに到着、12:00 SpO₂ 78%に回復

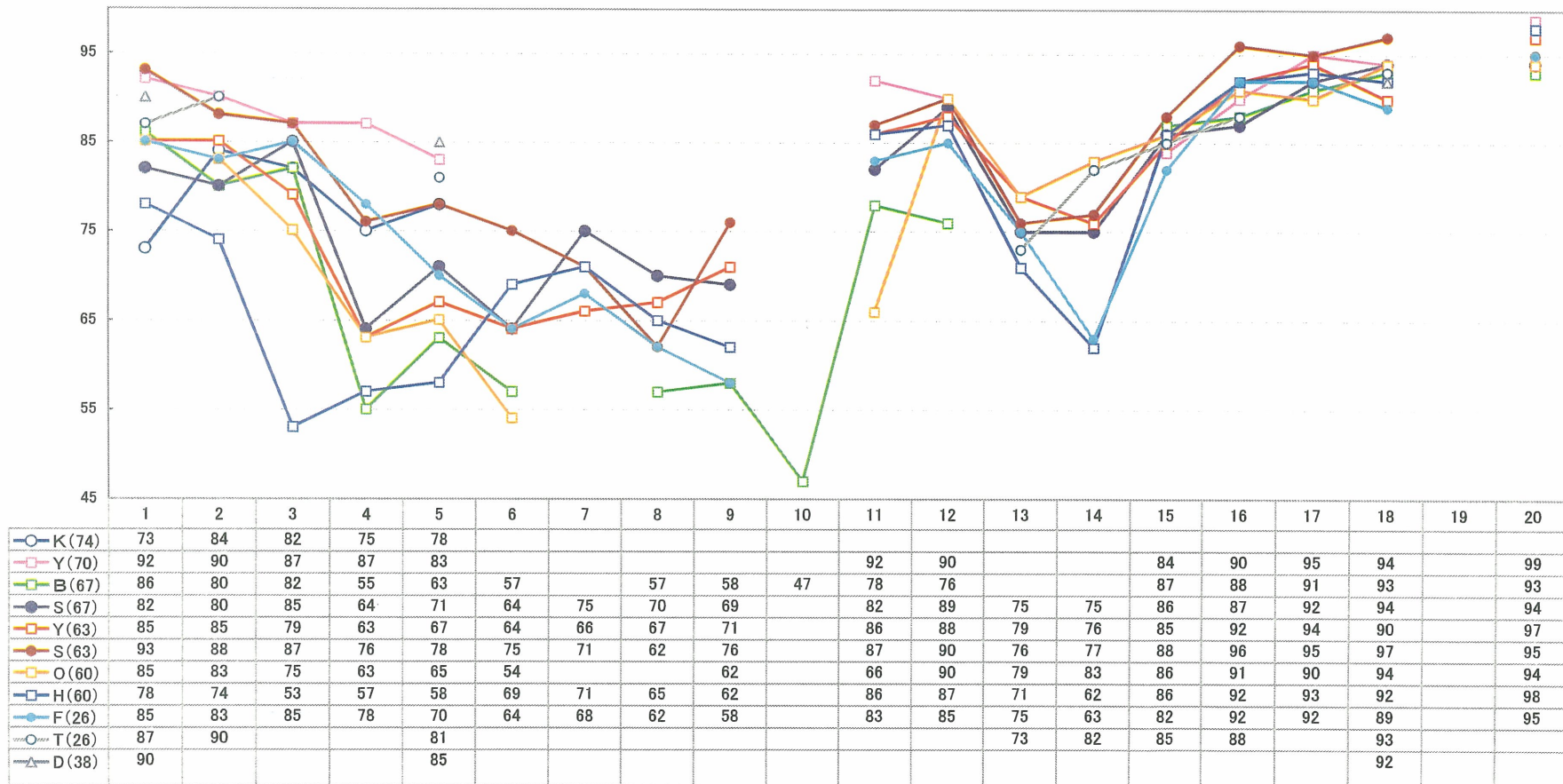
10月5日 夕

夕刻、前日から3回目の投薬

アイランドピーク登頂、エベレスト街道トレッキングに於けるSpO2の推移

2007年09月26日～10月13日

測定順	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑳	
測定月日	9月26日	9月27日	9月28日	9月29日	9月30日	10月1日	10月2日		10月3日	10月4日	10月5日	10月6日		10月7日	10月8日	10月9日	10月10日	10月11日	10月12日	10月13日
測定時刻 (Nepal)	18:00	15:30	16:30	18:40	17:00	18:00	7:30	15:50	18:00		12:00	7:30	16:45	18:45	16:45	17:10	17:47	17:30		9:20
当日の行動 凡例1. A>B AからBへ移動 凡例2. C<D CとDを往復	Namche<> Everest View Hotel (3800m) 4間行動	Namche > Mong la> Phortse 6時間行動	Phortse>Pangboche>Dingboche 6時間行動	Dingboche<>Nangar(5000m) 往復 4時間、午後Dingboche>Chhukhung 往復4時間	高度順化 Chhukhung<>Chhukhung Ri (5500m) 往復4時間	Chhukhung>Island Peak BC	同日測定 Island Peak BC / AC		AC>Island Peak (6189m)> AC>BC		Stay at Dingboche	同日測定 出発前／Dingboche>到着／Lobuche		Lobuche> Gorak Shep	Gorak Shep<>Kar a Patthar Gorak Shep>Pherich	Pheriche> Lasasa	Lasasa>Chumoa	Chumoa>Lukula 測定前に全員飲酒		Stay Kathmandu
測定地標高(m)	3,400	3,800	4,350	4,730	4,730	5,000	5,000	5,400	4,980		4,300	4,300	4,900	5,100	4,200	3,400	2,790	2,800		1,400
測定時の気圧(hPa)	670	647	606	578	576	548	560	527	550		610	608	560	543	609	669	731	724		877
測定場所	Namche Bazar	Phortse	Dingboche	Chhukhung	Chhukhung	Island Peak BC	Island Peak BC	Island Peak AC	Island Peak BC		Dingboche	Dingboche	Lobuche	Gorak Shep	Pheriche	Lasasa	Chumoa	Lukula		Kathmandu



別表

- (A) ダイアモックス 250mg 2錠
 プレドニゾロン 5 mg 2錠
 アントブロン (去痰) 2錠

10月6日 ディンボチェ (4,350m) よりペリチェ (4,200m) へ小さな尾根を乗り越えて至る。

- (B) ダイアモックス 250mg 1錠
 プレドニゾロン 5 mg 1錠
 アントブロン (去痰) 1錠

一日一回に減量して投与 (6日及び7日)。

10月7日 ペリチェ (4,200m) 滞在。 食欲、完全に回復。

10月8日 ペリチェ (4,200m) 滞在。 上から下山してくる6人を待つ。夕刻、SpO2 測定 87%にて投薬は行わなかった。

10月9日 ペリチェ (4,200m) よりナムチェに向かってキャラバン開始。SpO2 86%、以後回復、快調にキャラバンを続けカトマンズに到着。

10月10日 SpO2 91%

10月11日 SpO2 93%

10月12日 データー無し

ペリチェでのSPO2は測定器を他のメンバーがゴラクシェップ (5,100m) に持参したため、測定できなかった。

10月13日 SpO2 93%

以上、9月26日～10月13日の加療経過を報告します。

[追伸] 私見 —— 10月3日の高山病発症に関し、9月29日ナンガール (5,000m)、9月30日チュクンリ (5,500m) への無理をおしての高山順応が、かえって悪影響を及ぼしたものと考える。

Hは9月29日 SpO2 57%、30日、58%で風邪が回復せず、ナンガール (5,000m) へ登らず休養したことが、後に良い影響を及ぼしたと考えられる。

(文献)

- 1) 今日の診断指針 第5版 (医学書院 刊)
 P551 高山病 金田 正樹
- 2) 今日の治療方針 2004 (医学書院 刊)
 P700 高山病 松岡 健

(注釈)

- ① プレドニゾロン 5 mg 「
 リンデロン 2 mg 」 = 副腎皮質ホルモン剤
- ② SpO2 Saturation Pulse O2 動脈血酸素飽和度(%)
- ③ SpO2 測定器は「Oxypal Mini」日本光電工業 K.K 製
- ④ 人の氏名はアルファベットで表示させていただいた
- ⑤ 報告者 山辻 英也
 データ協力 兵頭 渉、 藤井 陽介

ランタン・トレック日記

兵頭 渉

10月14日

カトマンズ (1300m) > シャブルベンシ (1450m) < 8時間30分/バス >

06:50 軽自動車TAXIに客5人、HOTEL 発 大通りの貸切バスへ。

07:10 カトマンズ市内出発

カトマンズを取り囲む丘陵を北西に上る。ファミリーキャンプサイトの看板、水源で水をタンクに入れている給水車、二人乗りのオートバイが深い霧の中から顕れては融け込んでゆく。

カニカの丘への分岐点を過ぎたあたりから遙か下方の河床まで続く段々畑が朝日に照らされた見事な光景を車窓から楽しむ。前後を走る乗り合いバスは車中は満員、ルーフは荷物を積んだ上に人が数十人!!、落ちないのが不思議である。

09:45 トリスリバザール着

早めのランチは道路脇に軒を連ねる食堂でダルバート(金属の大皿にライス、カレー汁、豆スープ、カレー味のフライドチキン、野菜、チリスープ)。

10:10 トリスリバザール発

未舗装、クネクネと屈曲の多い一車線の道を、標高差 1600mをゆっくりと上ってゆく、スピードは禁物。ルーフ上の人、コーナー、対向車、がリスク要因。

12:15 グラングの先約2Km バス停止

この先500mにわたって恒常的な地滑り地帯。工事の状況に応じて通行制限、この日は通行禁止。荷物を下ろし、乗客は歩いて1Km先の乗り換えバスまで進む。貸切バスは折り返して帰ってしまう。乗り換えバスは指定席、一般乗客、貸切バスからの乗り換え客でスッタモンダ。我々は結局最後のバスに乗車、シェルパ、ポーターはルーフへ。

16:05 乗り換え地点出発

100人と2トンの荷物を社内とルーフに乗つけてそぼ降る雨の中、カトマンズに売られに行く羊

の群れをかわしながらシャブルベンシへ。車体の転倒は崖下への転落に繋がるのでバスはソロリ、ソロリとしか進めない。ドンチェを過ぎていよいよ暗くなり、バス転倒の恐怖を感じつつ発電所の明かりに導かれシャブルベンシに無事到着、皆ホッとした表情で下車。

19:50 シャブルベンシ到着

ホテルにチェックイン、ホテルの食堂メニューで夕食。

21:30 就寝

狭い夜空に満天の星、明日は良い天気。

10月15日

シャブルベンシ (1450m) > ラマホテル (2480m) < 6時間/実働 >

06:10 起床 カトマンズへ向かうバスは何れも定員の2倍以上の人員、ヤギ、荷物を積んで朝早い町並みをクラクションを鳴らしながら出発してゆく。

07:50 シャブルベンシ (1450m) 出発

バス通りから一段下がって少し進むとパーミッションチェックゲート、立派な吊り橋を渡り終わるとT字路。左へ行くと古くから使われているチベットとの交易路、右を辿り古くからの集落を抜けていよいよランタン谷。ランタン谷がボーテコシと合流する地点にかかる吊り橋を渡り、ランタン谷左岸へ。左岸の登山路の道幅は狭く、両岸から岩が迫り、水流近くは道が崩れかけている所も。上につれ谷は少しずつ開け亜熱帯の林、灌木の茂みからジジーとセミ(?)の音が川の流れの音と競い合うようなボリュームで聞こえてくる。

09:50 ドーメン (1640m) 着

左岸から落ち込んでくる流れに架かる吊り橋を渡ると小集落ドーメン。ダリア、タチアオイ、ケイトウによく似た稗の花に囲まれ小休止。

10:10 ドーメン (1640m) 発

10:45 パイロ/ランドスライド (1800m) 着

コックが日本から持ち込んだラーメンを出してくれた。旨い。ゴチソウサマと言いかけたらメインはこれからだと言う。ライス、ポテト、カレ

一、青菜、目玉焼き・・・今回のコックさんは昼、夜の2食タイプらしく、以後の旅では、朝軽く、昼夜しっかりの食事が続きました。

この対岸に昔は温泉が湧いていたが今は土砂で埋まってしまっているとの話を聞いた。出れば帰路、温泉で一杯出来たのに。

12:00 パイロ/ランドスライド (1800m) 発

細い道を緩やかに上下しながら登る。谷は狭く景色は望むべくもない。僅か対岸の植生にサボテンのようなのを見つけたり、蜂の巣の群落を見つけ昔見たドキュメンタリー“ヒマラヤのハニーハンター (?)”を思い出しながらひたすら歩くのみ。

13:00 バンブー (1980m) 着

少し谷が広がった数軒のロッジと砂地のテントサイトのある明るい場所。木陰で75ルピーのコカコーラを飲みながら小休止。

13:30 バンブー (1980m) 発

樹林帯の中をゆっくりと高度を上げてゆく。ランタンコーラに架かる吊り橋を渡って対岸へ、しばらく進むと急登が始まる。崖の上の岩陰にホワイトモンキーを発見、シェルパのデンジャラスな場所なので早く通り過ぎようとのシェルパの声に促され惜しくも写真には撮れなかった。急登の終点はリムチェ (2480m)、左からシャルパガンからの道が合流する。トイレ休憩をする。ここからは河床からドンドン離れて相変わらず樹林帯を進む。木々は針葉時からネパールの国花ラリグラス (大木のシャクナゲ) が多くなってきた。

15:30 ラマホテル (2420m) 到着

夕刻薄ら寒くなり薪ストーブに火を入れてもらい暖をとる、ランタン谷に流れる冷たい雪解け水と狭い谷で日照時間が短いせいか高度の割には寒く感じる。ストーブの燃料は倒木、エベレスト街道に比べ木が多いのかヤクの糞燃料は見あたらない。この部屋で休憩、タププリの夕食。Sさんお薦めの味噌を使ったみそ汁がイマイチ、みそ汁にショウガをタププリと入れていることが後日判明、持ち込んだ日本食材料の調理に関しては隊員が具体的に指示、指導する必要を痛感。

19:00 ロッジ裏の草地に設営されたテントで

就寝。

10月16日

ラマホテル (2480m) > ランタン (3512m)
<5時間/実働>

06:30 起床 ハローの声に起こされて、一杯の紅茶。洗面器に洗顔用のお湯。

07:00 朝食

07:45 ラマホテル (2420m) 出発

今にも降り出しそうな空の下、リバーサイド (2769m)、ゴラタベラ (3008m)、を経てアーミーポストでパスポートコントロールを受け、河床を遙か下に見ながら登り続けると、少しづつ谷が広がりはじめタンシャップに到着。

11:30 タンシャップ (3200m) 着

ランチ前のお茶を飲んでるとミゾレがパラつきはじめる。小屋でランチを食べ出発する頃は雨となる。傘、カップ、各自思い思いの格好で。

13:00 タンシャップ (3200m) 発

右岸からの流れに架かる小さなコンクリート橋を三つ越えると谷は大きく広がりランタンの集落が点在する台地が見え始める。谷の左右には雪を戴いた峰峰が聳えているはずであるが雲に閉ざされて何も見えない。

14:30 ランタン (3500m) 到着

雨の中ランタン到着。テントは設営せず、小屋泊まりと決定。冷えた体をストーブで暖を採る。此処でも燃料は薪、小枝である。Sさんの指導で小屋から双眼鏡にて一次隊のメモリアルプレートで大岸壁の麓に見つけお参りをした。

一時雲が切れ白く輝くランタン2、西稜のスノーリッジが顔を覗かせる、感激。

19:30 就寝

深夜トイレに立つと上空満天の星。早暁、強風が小屋を鳴らす。

10月17日

ランタン (3512m) > キャンジュン ゴンパ (3900m) <2. 5時間/実働>

06:00 起床 曇り空、地面も水場も凍結、新雪を纏った山肌や稜線はくっきりと。 06:30

紅茶、洗面、朝食

07:30 ランタン (3512m) 出発

晴れ上がりはじめた空の下、谷奥の秀麗な頂きを持つガンチェンボを正面に見ながらゆっくりと登る。ランタン谷は広々と展開し、雪化粧の山々を朝日に輝かせ我々を迎えてくれた。リルン氷河のモレーンを上り詰めるとうっすら雪化粧したキャンジュンゴンパの集落が目前に展開。左を見ると雲たなびかせるランタンリルン、リルン氷河、キムシュンの三本鎚が飛び込んで来る。ついに来た！！

10:00 キャンジュンゴンパ (3900m) 到着

テントサイトが雪でぬかるんでいるため小屋泊まりと決す。昼食までの時間、小屋周辺から周囲の山々の撮影。リルン氷河を遠望しつつ、S氏よりアズキ岩、C1、上部雪田など解説いただく。

13:00 ~ 14:30 ランタンリルンBCハイキング

BC訪問ハイキング、小屋からリルン氷河モレーンに向かい直行するも、左岸のモレーン丘から右岸のモレーン丘へは氷が融けて沈下した氷河床へ降り、登り直す事が必要のため時間不足となりBC付近を遠望し小屋へ戻ることにした。

夕日に染まるガンチェンボのヒマラヤ襷、クッキリと輝くポンゲンドクパの稜、リルン山頂は夕日に浮かぶ彩雲で隠され、グルリ300度、夕日に彩られ見事な景観を見せてくれた。

10月18日

キャンジュンゴンパ (3900m) STAY & Hiking < 2.5時間/実働 >

06:00 起床 朝日に輝くランタンリルン、夢中で写真に納める。

06:30 紅茶、洗面、朝食

07:50 小屋 (3900m) 出発

小屋の北、タルチョはためく岩峰目指して急斜面をジグザグ、岩峰から続く緩やかな稜線を周囲の景色を楽しむ間もなくひたすら 4500mピーク

目指して登る登る。

09:45 4500m ピーク 着

絶景なり！上下はリルン山頂からBC迄、左右は南東稜からキムシュンまで、リルン氷河を取り巻く国境稜線と峰峰が一大パノラマを成して目前に展開。一次隊、二次隊、そして初登頂を果たした三次隊の活動に思いを馳せる。

見渡せばヤンサテンジ、サルパチョーメ、ヤラピーク、ランシサリ、ポンゲンドッポ、そして明日の目標ガンジャラ、ナヤカンガが新雪を纏い輝いて見える。

10:30 4500mピーク 発

キャンジュンリに続く稜線を鞍部まで辿り、ヤク道と交錯する広い谷の右岸を集落目指して降りてゆく。まるで河床へ向かって滑空しながら降りてゆく鳥になった気分の眺め。

11:10 キャンジュンゴンパ (3900m) 到着

燦々たる陽光の下、ランチを愉しむ。午後、周辺の散策、ヘリポート、高地実験農場、気象観測施設、等が散在する台地にヤク達がノンビリと草を喰み、放牧馬を少年が束ねつつ歩んでいる。

今日はY氏の誕生日。コックさんがバースデーケーキをプレゼント。ロウソクは一気に吹き消され高山の酸素不足の気配は微塵も感じられない。オキシジェン値は83~92、全員ノープロブレムなり。

10月19日

キャンジュン (3900m) < > ナヤカンガBC (4900m) < 7.5時間/実働 >

06:00 起床

今日も晴天、リルン、キムシュンの頂が黄金色に輝く。瞬く間に光は国境稜線へと這い降りてリルン氷河の雪田を照らす、荘厳な儀式。

08:00 キャンジュンゴンパ (3900m) 出発

ガンジャラBC (5000m) へ一泊二日のトレッキング。一昨日の雪も大分沈んで歩きやすくなったことを期待するもピッケル、アイゼンは必須である。

集落から河床に向かって南下し立派な金属製

の架け橋を渡り河原を横切ると眼前に灌木の茂る急な斜面が現れてくる。この斜面を直登に近い形でグングン高度を稼いでゆく。2時間ほどで展望の良い丘(4200m)に達す。谷を挟んでリルンが正面にそれに連なる右岸の山並みが美しい。T氏が2004年に挑んだランシサリ(6412m)南壁頂上部が朝日に照らされ姿を見せる。4400m位から残雪が小石や草を隠し歩きにくくなる。4500mから我々はアイゼンをつけて急な雪面を登りプラトーに着いた頃、後ろに付いてくるはずポーターが遙か下の方で固まっている。シェルパは雪の状態が思ったより悪いいためポーター、コック達はこれ以上は登れない。我々とシェルパだけでガンジャラ往復に変更する提案あり。やむなくこれを了承し、4900mのナヤカンガBC付近で引き返すこととした。

13:35 ナヤカンガBC(4900m) 着

ナヤカンガBC付近でランタン谷奥のランタンリ、モリモトピーク、ペタンカルポ、シシヤパンマ(帰国後の写真で判明)を遠望し帰路につく。

13:50 ナヤカンガBC(4900m) 発

上ってきた道は思ったより長く、キャンジュンゴンパのロッジに着く頃はヘトヘトであった。

16:30 キャンジュンゴンパ(3900m) 到着

本日の行動では標高差 1000mを5時間で登り(200m/時間)、2.5時間で下った(400m/時間)、地形、積雪、荷物など状況に左右されると思うが4000m前後の高地での行動の目安として使えると思う。因みに富士山では登り 300m〜450m/時間、下り 600m〜800m/時間が山岳会メンバーの記録である。

明日以降の計画を検討、20日〜23日はランタン谷の奥、ティルマンのゴルカハーゲンのゴルカを越えてチベット側を覗く、24日〜26日は一気にシャブルベンシへ下る。氷河の状況によっては早めに下降に転じヤラピーク登頂を試みる。

10月20日

キャンジュンゴンパ(3900m) > ランシサカルカ(4200m) < 4時間/実働>

06:30 起床

08:00 キャンジュンゴンパ(3900m) 出発

高度差 300m、広い平坦な河原を三時間ほど遡ると左の氷河から流れ込むモレーンの丘を回り込みながら登っていく。ランシサリとガンチェンポを兩岸に対峙させるランシサ氷河の奥に純白の三角錐ウルキンマン(6151m)が姿を現す。今日のテントサイトは10分ほど先の平坦な河岸段丘の古いカルカの下だ。

12:10 ランシサカルカ(4200m) 到着

バックランチの残りを食べてテント、個人装備の到着を待つ。

一時過ぎからアラレが降り始め明日からの天候悪化が懸念される。

ポーター達が三々五々到着しテント設営、装備展開し午後の長い休憩に入る。

17時頃には雪はやんだが雲厚く周りの山々は見えない。明日はモリモトBCまで、S氏は二十数年前の記憶を呼び戻すのに一生懸命である。地図表記の位置、高度と記憶が全然一致しない!!とりあえず明日確かめることとして早めの就寝。

10月21日

ランシサカルカ(4200m) > モリモトBC(4700m) < 3時間/実働>

06:30 起床

08:00 ランシサカルカ(4200m) 出発

昨夕からの雪がうっすらと残っているテントサイトから南方に朝日に輝くガンチェンポがシャープなリッジを従えて登行欲を湧かせる。下流からとは全く異なる山容にヒマラヤの山々のスケールの大きさを実感する。

10:40 モリモトBC(4700m) 到着

先行していたランタンリを目指すフレンチ隊のテントが散らばって張ってあるモリモトBCはS氏の記憶とは全く異なる場所にあった。市販地図の表示はトレッキング用のテントサイトとしてマークしているとの結論に達した。

11:00 モリモトBC (4700m) 発

北西から本流に流れ込む谷の左岸のサイドモレーンを辿ってモリモトピークと当時のオールドBC (以後ABC: アタックBCと表記) の確認に行く。F君は体調すぐれずテントサイトで休養。

12:20 モレーン上部 (4900m) 到着

ゴロゴロした岩が多いモレーンの遙か先に氷河末端が白く帯状に広がっている。その右端がモリモトABC (5500m) と判明。登攀時間と推定高度を考えるとS氏の話が大体つじつまが合うこととなり全員納得。振り向くとビッグホワイトピークが氷河の奥に泰然と有る。こちらから上るにはどこにルートを見いだせるか? イメージクライミングを楽しむ。

13:00 モリモトBC (4700m) 帰着

12時過ぎから谷の下部から湧いてきたガスが周辺の山々を包み込み霧が降り始める。ここ数日午後から雲が湧き夕方から雪になり明け方には晴れ上がるパターンが続く。フレンチ隊のシェルパ達の話から谷の上部はとても荒れていてポーター達のルートが確保出来ないためランシサリへ転進するとのこと。日程、体調、氷河の奥の状況を検討し我が隊の今後の日程を以下と決した。

10/22 2, 3時間氷河を奥に詰めて、ヌマバツァング

10/23 ヤラピーク BC、10/24 キャンジュン、10/25 ラマホテル

10/26 シャブルベンシ、10/27 カトマンズ

10月22日

モリモトBC (4700m) > ヌマバツァング (4000m) <4時間/実働>

06:00 起床

08:00 モリモトBC (4700m) 出発

右岸のサイドモレーンを上流へ、中央部とは200m位の標高差、氷河はモレーンで覆われ、凸凹が激しく、大小様々な氷河湖が散在している。中央部への降り口を探しながら進むも見つからず。

10:00 ランタン氷河・サイドモレーン 4835

m地点 到達

谷奥の峰峰やティルマンのコル、ハーゲンのコルへの興味は尽きないがこの時点で引き返すこととする。S氏が歩いた二十数年前に比べ氷河の後退が激しくこれから先はポーターも使えずクライミングの領域といえる。それなりの準備と時間が必要と痛感する。

11:00 モリモトBC (4700m) 帰着

フランス隊から暖かい紅茶をごちそうになる。隊員、シェルパはC1へ荷揚げ中、・・・氷河を上り始めているようだ。クライミングパーミッションは取り直し、手続きはキャンジュンから電話でカトマンズの登山局と

2時間ほど下ると今日のテントサイトへ着く。

13:30 ヌマバツァング (4000m) 到着

ヤクや馬が草を喰み、数個のカルカの有るテントサイト、明日は200m上のタルチョへ向かい急坂をヤクの踏み後を辿る。

10月23日

ヌマバツァング (4000m) > ヤラカルカ (4800m) <4時間/実働>

06:00 起床

08:00 ヌマバツァング (4000m) 出発

ヤク道をひたすらタルチョ目指して上る。タルチョを過ぎるとカールの底、カルカの脇で尾根越えのルートを確認する。尾根を一つ越えれば後は下るだけだと考えていたが、後ろに行きに急な雪壁を上る尾根が隠れていた。ポーター達は雪は苦手なようでユルユルと上ってゆく。これを上り終わると雪原、100mほど進むとコルの末端に到達。

11:50 ヤラカルカを見下ろすコル (5000m)

地点 到達

先行したポーター達がテント設営を始めている場所めがけて下って行く。ヤラピークキャンプとは少し離れているようだ。

12:45 ヤラカルカ (4800m) 到着

谷に向かって少し下った所に日本シニア隊のテントが張られヤラピークをアップザイレンで

下る仲間を双眼鏡で見ている人がある。

一時過ぎから霧が周囲を包み始める。明日の好天を期す。

10月24日

ヤラカルカ(4800m) <> ヤラピーク(5500m)

ヤラカルカ(4800m) > キャンジュンゴンパ(3900m) <10時間/実働>

03:00 起床

04:00 ヤラカルカ(4800m) 出発

ヘッドランプを点けて山頂で日の出を！のペースで歩き始める。思う様に足があげられない。少しずつ明るくなって行く、周囲を見渡すとピークは遠い。傾斜が少しずつ強くなる、ランタンリルの頂を朝日が黄金色に染め始める頃、ピークが間近に迫ってきた。最後の雪壁を上り、雪稜を10m辿るとヤラピーク！頂上は狭く切り立っている。遠くシシャパンマ、ランタンリを望む。足下の大きな氷河を隔ててモリモトピーク、キュンカリ、振り向くとリルンが朝日に照らされて秀麗な山様を見せている。

07:10 ヤラピーク(5500m) 山頂

高度差1600mをひたすら下る。ツエリコリの北斜面を回りこみサーチェピサのカルカを過ぎると足下に500m幅の河原を広げるランタン川を鳥瞰図のように見ながら下る。

15:30 キャンジュンゴンパ(3900m) 到着

夕ご飯までのひととき集落のあちこちを見て回る。ヤクのマフラー、ブランケットが格安、お土産に買って行こう。

10月25日

キャンジュンゴンパ(3900m) > ラマホテル(2600m) <7時間/実働>

06:00 起床

07:30 キャンジュンゴンパ(3900m) 出発

16:00 ラマホテル(2600m) 到着

10月26日

ラマホテル(2600m) > シャブルベンシ(1400m) <3時間/実働>

06:00 起床

07:50 ラマホテル(2600m) 出発

11:30 シャブルベンシ(1400) 到着

河原に設えられた湯だめに浸かり、石けんをふんだんに使って久しぶりのお風呂。湯の質はミョウバン泉ノようだ。湯温はベスト、湯量は少なめ、雰囲気は最高。

来るときに歩いたランドスライドの場所はバスが通れるようになっておりカトマンズまで乗り換えなしで行ける。貸切ジープが深夜到着予定。

トレッキング成功のケーキで御祝い、ロッジのロビーで夜遅くまで打ち上げパーティー。ネパールダンスを踊る。

10月27日

シャブルベンシ(1400m) > カトマンズ(1300m) > <8時間/バス>

06:00 起床

07:30 シャブルベンシ(1400m) 出発

16:00 カトマンズ(1300m) 到着

貸し切りバスで楽勝、ユッタリ景色を楽しみながら。桜が季節外れ(日本の常識では)の花を咲かせ、リス、サルが木々の梢を渡り歩いて行く。

カトマンズまであと2時間！のところで渋滞発生、白いバンが崖下に転落、この影響で2時間ほど遅れたが、無事喧噪のカトマンズに。



2007年秋 ヒマラヤ・トレッキング

現役 藤井 陽介

〔1〕 エベレスト街道とアイランドピーク
2007.10.31 Wednesday

9/22~9/23 関空→バンコク→→カトマンズ
2日かけてカトマンズへ。そこは人、バイク、
埃だらけの街で、初めて見る騒がしい景色に
少し興奮してしまった。

9/24~9/30 カトマンズ→→ルクラ→パクデ
イン(2610m)→ナムチェ→→→チュクン
(4730m)

7日間かけてチュクンへ。途中、エベレスト
ビューホテル(3800m)・ナンカール
(5000m)・チュクンリのセカンドピーク
(5320m)に寄り、高度順化を図る。だがこの7
日間はずっと雨で、景色も見えないしウンザ
リだった。日本から持って来た風邪がなかなか
治らず、喉がずっと痛い。Dr.山辻からもら
った薬も効かず・・・それと同時にやはり高山
病になったらしく、4000mを越えると1日に
数時間は頭痛がしていた。

10/1 チュクン→アイランドピーク B.C.(5075m)

朝 起きるとなんと晴天！佐々木さんが「10
月になったら晴れるよ」と言っていたのは本当
だった！（この時ばかりは佐々木さんが魔法
使いに見えた）

川勝さんがこの日に帰る予定だったのでお別
れをし、B.C.を目指す(Dr.山辻はチュクン滞
在)。B.C.までは快適な山歩き。景色がステキ
で楽しかった。だが夜になるとそれは一転す
る。息苦しくて眠れないのだ。咳も出て苦し

いから、大きなイビキをかいてる大島さんを
横目に1人、外に出る。月が出ていた。その
周りには数えきれない星。ヒマラヤの雪壁が
幻想的に映し出されている。ただただ、綺麗
だった。少しだけ、気分が楽になった。

10/2 アイランドピーク B.C.→A.C.(5385m)

2時間で登れたものの、テントの中は33℃、
526hPa・・・暑くてたまらず外に出るも、外は
風がとても冷たく乾燥していて日差しも強い。
岩陰で羽毛服を着て日が暮れるのを待つ。

10/3 A.C.→アイランドピーク山頂(6189m)→B.C.

早朝 1:00 起床。大島さん&兵藤さんのイビキ
で1時間しか寝れなかった。2:10 出発。3時
間登ると雪が出て来る。ピッケル etc 取り出
し、(僕は嫌いな)コンテで登る。最後の雪壁
(200m)はユマールで確保しながら登ったが、
とにかくしんどかった。しかも高度(or 睡眠不
足)の影響からか頭がぼおとしてしまって、
自分が何をしているのか一瞬分からなくなる
ことも(朝日が眩しく強かったのもそれに拍
車をかけた気がする)。日の出から一時間程で、
佐々木君・山田君・兵藤君・藤井はなんとか
山頂に着く。そこからの眺めは良かった。写
真を数枚撮る。ウイダーインゼリーを飲もう
としたが、少量しか飲み込めなかった。

下山・・・頭がボケているので懸垂下降がとて
も恐ろしい。雪の無い所まで下ると、今度は
下痢と嘔吐に悩まされる。結局、B.C.へ下る
まで、体の中のものが全部出てしまった。昼
食は食べれず、夕食はほんの少しだけ食べて、
その他はずっと寝ていた。

10/4 B.C.→ディンボチェ

朝から調子良かった。高山病と共に、風邪も治ったらしい・・・。前日 B.C.まで下ったことが良かったのだろう。ディンボチェまで行くと、山辻さんから無線が入る。どうやら伴さんが肺水腫で動けないらしい・・・。

10/5 休息

伴さん何とか自分の足でディンボチェまで来る。どうやらひどい症状ではないらしい。

10/6～10/8 ディンボチェ→ロブチェ→ゴラクシェプ～エベレスト BC 付近(5250m)～カラパタール(5500m)→ペリチェ

Dr.山辻、伴さんはペリチェへ。他はゴラクシェプまで行き、エベレスト BC とカラパタールを往復する。特にカラパタールは尾根上のちょっとしたピークで、そこからエベレスト・ヌブツェ・プモリ・・・が大迫力で見られた。充分に朝焼けの山々を堪能した後、ペリチェへ2人を迎えに行く。

10/9～10/12 ペリチェ→カトマンズ

4 日間かけてカトマンズへ帰り、トレッキングの前半が終わった。(ランタン谷に続く)

[2] ランタン谷
2007.11.01 Thursday

10/14～10/17 カトマンズ→ジャブルベンシ→ラマホテル→ランタン→キャンジンゴンバ(3900m)

ジャブルベンシまでは1日かけてバスで行く。貸し切りバスだったが、土砂崩れ地点を歩い

て通過したため、途中から乗り合いバスに。臭いネパールオヤジが隣に座りやがって仕方なく耐えること4時間。喉が痛くなってしまった。

次の日から山歩き。ラマホテルまでは殆ど樹林帯、ランタン村近くからは、なだらかな道となる。ランタンではメモリアルの銅板を見つけることが出来たので、磨いて手を合わせた。キャンジンゴンバに着くと、年に一回のフェスティバルということで子羊を一匹買ってさばいてくれた・・・。

10/18 キャンジン・リ手前のピーク(4555m)往復

ピークは360°の展望で素晴らしい。そのうちの300°は雪山である。ランタンリルンが目前にでっかくそびえている。

10/19 ガンジャラ(峠)手前(4900m)往復

ナヤカンガ(5880m)のBCで泊まり、翌日に登攀する予定が、雪でポーターが登れず、メンバーとシェルパ2人で峠を往復するのみとなった。この日は標高差1,100mをひたすら登ったが、比良山登っている感じで全くきつくなかった。アイランドピークの高度順化がしっかり出来ていたのだと思う。

10/20 キャンジンゴンバ→ランサ・カルカ(4120m)

ここまで来るとウルキンマンなどが見える。伴さんが初登頂した山らしい。

10/21 ランサカルカ→モリモトピーク BC(4780m)

モリモトピークは佐々木さん初登頂の山。自分はこの日、朝から調子が悪く、下痢の連続。歩くと気持ちが悪くて常に下痢と吐き気との戦い。BCから他の3人はピークに向かって

少し歩いて行ったが、自分は気分が悪くてキャンセル。夜になると更に悪化し、夕食も 2 口くらいしか食べれない始末。下痢止めと整腸剤も全然効かず、しかも息苦しくて眠れないのだが、ダイアモックス(高山病の薬)が効き始めるとそこそこ寝れた。薬の効果恐るべし・・・と実感。

10/22 BC→ランタン氷河を 1 時間遡り(他の人は 2 時間)、chyadang 手前(4040m)まで薬のお陰か、朝食はそこそこ食べれた。だが、どんどん高度を下げてるのに連続して 1 時間も歩けなかった。特に登りはすぐに息が切れるし、胸(肺)が痛みやがる・・・。

10/23 chyadang 手前→峠越え(5035m)→ヤラピーク BC(4835m)

今日も朝から気分が悪く、ダイアモックスなど服用。少々しんどかったが、何とか峠を越えて BC へ。どうせ下痢でそのまま出てしまうし食べる気も起こらないのだが、夕食は無理矢理半分食べた。佐々木さんと一緒にのテントだったので、高橋真理子を聴きながら寝た。

10/24 ヤラピーク BC→ヤラピーク山頂(5500m)→キャンジンゴンパ(3900m)

この日はホントにしんどかった。朝 3 時起床、下痢。ムカムカしながらおかゆを食べる。気温マイナス 7℃の中、重登山靴、スパッツを付けて登る。本調子ではなく、吐き気と下痢と戦いながら登る。ひたすら登る。途中アイゼン出すも、力が入らず、バンドをシェルパに締めてもらう始末・・・情けない。3 時間後、ふらふらしながらも何とか山頂に着く。山頂は広いものではなく、4 人で精一杯。しかも東側は切れてる・・・慎重にゴザインタンなど

の写真を撮り、下山。下山がまたしんどい。下痢と闘いながらの下山。1600m 下るのに 4.5 時間もかかってしまった。

しんどかった理由に、気分が悪くて休憩時間にメシが喰えなく、シャリバテしたというのもある。アクエリアス 400ml・飴 2 個しか口に出来なかった。とはいえ何とかキャンジンゴンパに着き・・・どうせ下痢なんだしと、ビールを飲んでやった。

10/25～10/27 キャンジンゴンパ→ラマホテル→シャブルベンシ→カトマンズ

あとは帰るだけ。5 日間殆どモノを食べられなかったからか、ラマホテルまでは悲しいくらい体に力が入らず、シェルパに荷物を持ってもらう始末。途中、ランタンでメモリアルに線香をあげる。シャブルベンシまでは朝食をそこそこ食べれたので何とか頑張れた。調子悪い間ずっと後ろを歩いてくれた兵藤さんに感謝！夜は御馳走でした(鶏 3 匹+ケーキ)・・・殆ど食べられないんだけど。

カトマンズへはジープで帰ると聞いていたが、来たのは何故かバス・・・ほんと、テキトーだなこの国は。。8 時間かけてカトマンズのホテルへ戻る。

何というか、世界一美しい谷=ランタン谷 は本当に綺麗だったが、下痢で苦しんだ思い出が 90%以上を占めてしまっている。。

10/28 休息

山岳部員への土産(地図 7 部)を買う。誰か使ってね。

10/29～10/30 カトマンズ → バンコク → 関空
下痢が治らないまま帰路につき次の日に関空着。38 日という長い旅が終わった。

皆さんお世話になりました。佐々木さん、貴重な体験をありがとうございました！

三島義彦氏を偲ぶ

藤本 勇

戦前のお阪商科大学山岳部の黄金時代に活躍された三島義彦氏が去る11月1日自宅で亡くなられた。享年91歳。法名は「釈 顕岳」

積雪期の黒部川を後立山より横断した記録や前穂高北尾根4峰甲南ルートにアイスハーケンを打って積雪期の初登攀を目指された記録などは部報「雪線」に掲載されていたが、それらの記録が山岳部のルームが火事にあい焼失してしまったので故人の足あとを辿るのは難しくなったのは残念です。

戦後は戦地から復員された先輩の中でも森本嘉一氏と故人らが中心となって若手の連中をヒマラヤへとかき立てていただき1961年のランタンリルン遠征が実現できた。森本・大島氏がリルン氷河に眠っておられるのを追悼し2次隊の遠征隊長として登山隊を編成されたが、時期が悪く実現できなかった。

大阪薬専の佐藤耕三氏らと作られた銅板碑が奥又白にあったのを駒ヶ根のヒュッテ雪線に移設してヒュッテの基礎の部分に固定したのが10月末であった。故人はそれを見届けてから旅立ったのでしょう。きっと今頃は天国で皆に報告されていることだろう（注1）。また平成5年の6月の新緑の時期に奥又の銅板碑に参られている（注2）。

平成3年5月にランタン谷にヘリコプターを使つてのトレッキングに参加されてキャンジュンゴンバのテントで森本さんの好きだったメンデルスゾーンの曲を一人静かに聴いておられた姿を思い出す。また故人の棺の中にランタンリルンの書物を奥様が入れられたのは、どれほどランタンリルンを懐かしく思っておられたのかが分かる。あの時は森本夫人や大島健司さんの弟さんも参加していただいた（注3）。このあと10月に脳梗塞発病され右半身に麻痺が残った。しかし奥様の手厚い看護とりハビリによって杖をついてではあるが歩けるようになった。

平成6年の5月には奥様同伴で立山の雷鳥荘に麻痺の残る病身に鞭打つて来られて、久しぶりの雪山を満喫された（注4）。また同年の秋に剣の馬場島で永田君の追悼会にもご夫婦で参加されました。そのときは戦前女性で前穂高4峰正面をクライムされた小林静子（旧姓長谷川）さんも参加されて、夜遅くまでキャンプファイヤーの前で往時の思い出話をされていた（注5）。

まだお元気だったころ中島喜一さんとご一緒に比良の高津山荘にも来られて、中島さんとご一緒に二階への階段の手すりを作つていただいた。一緒に山小屋で食べたスキヤキの味が忘れられない。（注6）

阪神大震災のとき甲子園のご自宅の二階が大きく壊れて、二階の部分を撤去される工事

のときに親戚や知人宅を回られていた。そのとき狭い我が家にも1週間ほど滞在されて一緒に生活できた思い出も懐かしい。我が家の庭には故人から頂いた椿が2米近くに成長し、毎年美しい花を咲かせてくれています。

何度も甲子園のご自宅に光子の作った手料理を持ってお伺いし、お元気なお姿を拝見して安心していました。今回も東京での用事を済ませたら銅板碑の移設の話をしに伺う予定だったが、小生の上京の時期と故人の告別式とが重なり参列できなかったのが残念です。

ご逝去の様子は往生だったとお聞きして安心しました。最近では病院でなくなる方が多いのにご自宅で息を引き取られたのはご本人も満足しておられることだろう。その様子はご遺族から次のように聞きました。

前夜まで元気でマグロのお刺身を美味しく食べられたそうです。
亡くなる前日にご親戚の葬儀があり、それにご子息が参列されて報告を電話でなされると、「わしは日本シリーズで阪神を負かした中日が勝って気に入らん！落合は好かん！」と電話で話されたのが最後の会話となってしまわれた。夜中の2時ごろに大声を発せられたそうです。おそらく、その時に心臓発作が出たものと思われる。翌朝、起きてこないで奥様が起こしにゆかれたら、眠ったまま逝ってしまわれた。

まるで紅葉した木の葉っぱが風もなく静かに散ってしまったような往生だった。
故人は山と椿と美味しいものと阪神タイガースをこよなく愛されました。

いまはただ故人のご冥福をお祈りするばかりです。

合掌

注1 山岳会ニュース No.3~4 「銅板碑の人々」前編・後編

注2 山岳会ニュース NO. 11 「新緑の中を銅板碑へ」

注3 山岳会ニュース No. 5 「ランタン・ヘリコプタートレッキング」
「リルンを見て」

「森本夫人のランタン・トレックにお連れて頂いて」

注4 山岳会ニュース No.14 「第2回立山自然の旅」

注5 山岳会ニュース No.15 「永田文康氏追悼号」

注6 山岳会ニュース No.19 「中島喜一氏を偲ぶ」

「山岳会ニュース」は OCUAC のサイト (www.ocuac.org) に創刊号より最新版を掲載してある。

鷺田英毅さん、さようなら

奥様から血圧低下の知らせがあり、その日の午後ご逝去の訃報を受け取りました。予期していたこととはいえ、我々岳人のひとりが亡くなったことで、大きな悲しみに包まれました。思い起こせば、私が大学入学直後山岳部入部を希望し部室を訪ね、最初に應對してくれたのは1年先輩の鷺田さんでした。篤実なお人柄だと思いました。初めての夏山合宿参加を何の装備も持たない私は逡巡しておりました。そんな夏の暑い日に鷺田さんが私の下宿を訪ねてきてくれ、靴、ピッケル、シュラフは心配するな、用意するからと合宿参加を勧めてくれました。もちろんそれらは全て借り物でしたがひと通り揃い、鷺田さんらに引っ張られて20日に及ぶ夏山剣岳合宿に参加しました。これが契機となって私は山を愛する岳人になったのです。鷺田さんは同僚の常慶さんとよく我々を指導してくれる良きリーダーでした。現役時代は厳冬期の剣岳小窓尾根、早春の黒部川源流横断、穂高滝谷グレボン岩稜登攀など多くの足跡を残されました。卒業後は日立プラント（株）に就職、しばらくは仕事に追われ、山は遠ざかったようですが、リタイア5、6年前から再開されました。亡くなる2年前の8月には徳本峠越えで上高地に入り小梨平にキャンプ、焼岳に登って下山後中の湯温泉に泊まりました。翌9月には鷺田さんご夫妻、我々夫婦らで八ヶ岳の赤岳鉱泉小屋に泊まり、赤岳登頂後渋御殿温泉でゆっくりしたのが、今から思えばこれが最後の山行になりました。下山してしばらくして、鷺田さんからお電話をいただき、胃癌を罹患していると知らされました。でも本人は何の不安もないご様子で「10月の定期健診で引っかかったんや」と言っていました。最後の山行から2ヶ月後の11月開腹、摘出手術を受けられましたが、意外に悪く全摘でした。手術後翌年10月ごろは、私の参加した「しまなみ街道80km Walking」の応援に駆けつけて来る元気さがありました。その後病状は徐々に悪化し入退院を繰り返し、闘病生活が続いたようです。11月12日私は入院先にお見舞いに行きました。ベッドに横たわる鷺田さんは8ヶ月のお孫さんをあやして、微笑んでおられました。私とは山での楽しかった思い出など語り合いました。1時間ぐらいの面会のあと手を握り合ってお別れしましたが、これが最後になるとはとても思えませんでした。告別式は郷里、奈義町の方丈さんに羽曳野までお出まし願ひ、故人ご遺族のご意向で親近者でとり行われました。山岳会からは先輩の小笹さん、伴さんらが参列されました。私は遺影に向って「あなたは剣の雪稜に、穂高の岩稜に、我々の胸に大きな足跡を残されました。どうか安らかに休息ください」と口ずさみ、最後のお別れをしました。

合 掌

鷺田英毅（昭和40年経済学部卒業）

2007年11月29日 逝去 享年67歳

2007年12月8日

上田 忠士

雪線10周年行事報告

中島 信正

大阪市立大学山岳会・駒ヶ根山荘「雪線」は本年（平成19年）、建設10周年を迎えました。これを機に記念行事を行ってきましたので、ご報告します。

1. 雪線へのお誘い

雪線建設に際しては多くの方々の、色々な形でのご協力を頂きました。これらの方の中で、まだ一度も雪線に來られていない方をお誘いし、そのご協力に感謝すると同時に、雪線の現状をご理解頂くべく計画した。会員の高齢化と雪線の収容人数を考慮し、対象は会員の約半数のS. 39卒までの方とし、2回に分けて行った。

第1回（5月26～27日）

対 象 ; S. 27～33卒（お誘いした方 ; 9名）

参加者 ; 高木（S.30、初来訪）

広谷・山本（S.30）、川勝、兵頭、中嶋

計6名

第2回（6月2～3日）

対 象 ; S. 34～39卒（お誘いした方 ; 8名）

参加者 ; 中西（S.34、初来訪）、山北夫妻（S.36、初来訪）

小笹・近藤（S.35）、山辻・長谷川・川勝（S.36）、伴、上田

計10名

2. 雪線の点検、補修

10年経過した雪線の建屋、設備、備品等に付いて、利用者が今後共、安全に快適に過ごせる様に点検し、必要な補修、更新を行う事とした。

（1）建屋本体の点検・工事（建築請負のビッグフットに依頼 ; ￥73,500）

- ・ 屋根材は異常無いが、清掃が必要。 → 11月2日 済み。
- ・ ログ壁、デッキ、ベランダ、階段は塗装を適宜行えば、問題無い。
→ 塗装状況を観察し、DIYで塗装予定。
- ・ 薪ストーブ本体はオーバーホール必要。 → 11月2日 済み。
- ・ 同 上 煙突は清掃が必要。 → 同上
- ・ 屋根に掛かっている枝払い必要。 → 同上

（2）石油ストーブの点検（メーカーの日立に依頼 ; ￥4,095）

本機は設置状況もBESTに近く、使用実績（時間）から判断しても、当分の間、使用上問題は無い。

- ① 給排気管が最短の配置である。
- ② F. F式の為、燃焼排ガスはSUS製の熱交換部が破れ無い限り、室内に出る事は無い。（SUS ; ステンレス）
- ③ 管継ぎ手も全てSUS製であり、ゴムは全く使用していない。

（1）

→ 以上の結果、当分このまま使用する事とした。

（3）備品の更新、他

スリッパ、枕、マット、等の更新、及びエンジン式草刈機購入を推進中。

3. 秋の記念イベント

雪線開設以来、毎年11月初旬の連休に合わせてイベントを開催している。

10周年の記念イベントは「会長杯GOLFコンペ」「山行」を計画したが、ヒマラヤトレッキングとも重なり参加者が限られ、「GOLFコンペ」のみ実行された。

(1) 「OCUAC会長杯」GOLFコンペ(11月2日)

参加者 ; 橋本、川勝、小笹、久保田、中嶋、吉田、
丸子、藤木、広瀬、澤井、大堀 計11名

場 所 ; 高森カントリークラブ

(2) 雪線周辺の除草作業及び地階倉庫の整理、整頓、清掃(11月3日)

4. 銅板碑の設置

一昨年、奥又白谷より回収された銅版碑は雪線に保管されていた。奥又白谷の現地では何度か剥落し、そこに未永く固定する事は困難として回収された物である。

この我々OCUACの礎を築いた今は亡き大先輩、を含む山の先駆者の名が刻まれた銅版碑は、当時を偲ぶ歴史的遺品として雪線の敷地内に設置する事が決定された。

〔設置場所〕 雪線東面(地階倉庫入り口側)、
倉庫入り口左上、基礎コンクリート面

5. 今後の課題

(1) 雪線管理の継承

雪線建設後、その管理は「雪線管理委員会」により行われ、その後幹事会に移された。しかしながら建設に携わり、当初からその維持管理を自主的に行ってきた方々無くしては、現在の良好な姿は維持出来ていなかったと思われる。

雪線も10年を経て、上記の如く今のところ大きな問題は無いが、これまで提起されてきた課題や今後漸増するであろう維持・管理上の問題等への対応が従来以上に求められると思われ、幹事会を中心とした体制を、世代交代も含め考えるべき時期にきていると思われる。

(2) 利用規定の遵守

利用規定は雪線を利用される方が気持ちよく過ごし、後の利用者にもそれを引き継いで貰うのに必要なルールを定めた物である。お互いにこれを遵守する事に依り、雪線が安全に、衛生的に、美しく維持されているが、今後共これを徹底して遵守して行く事が求められる。

(3) 当面の検討事項

① ログ壁、デッキ、ベランダ、階段、の再塗装

上記の如く、会員の方の協力を得ながら状況を観察し、DIYで塗装作業を行う予定。その時期の見極めが必要。

② 給湯器の更新

ビッグフットの点検時、「給湯器の一般的な耐用年数は約10年となっている。今後数年の内に交換することを検討して欲しい」とのアドバイスあり。

③ 敷地内除草作業の外注

除草作業は毎年2回程、定期的に行う必要がある。会員の高齢化を考えると外注化も考慮必要。

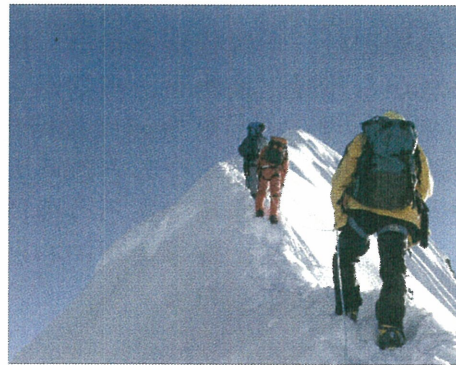
(以上)



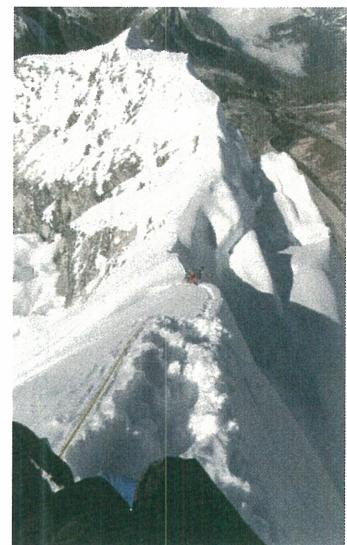
アタカマ・パシフィカ



ダイニング・テントにて



アイランド・ピーク頂上へ



I.P.からの下降



ゴラクシェップにてヌプツェを背景



漸く見えたエベレスト



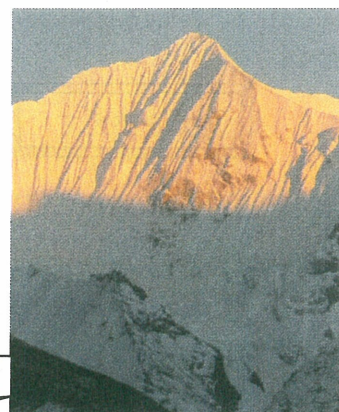
帰路、背景はアマダブラム



エベレスト夕景



プモリを背景に



ガンチェンポ夕景



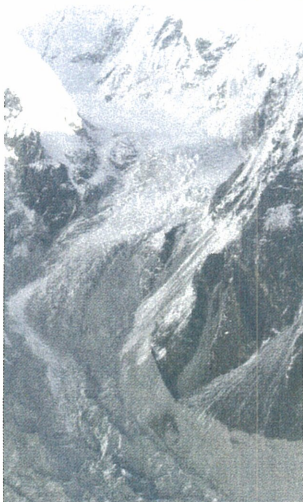
タンポチからのエヴェレストとローツェ



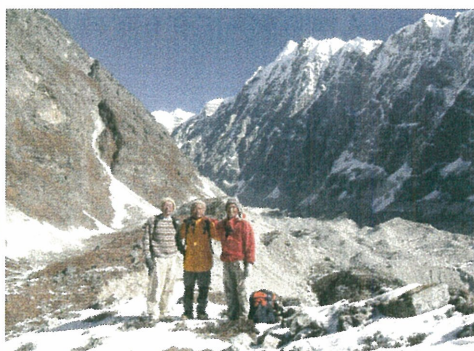
もりもり昼食



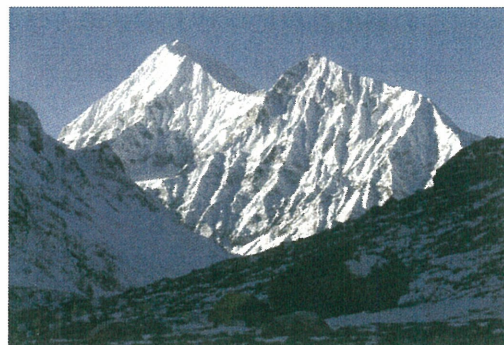
ランタン氷河を北上



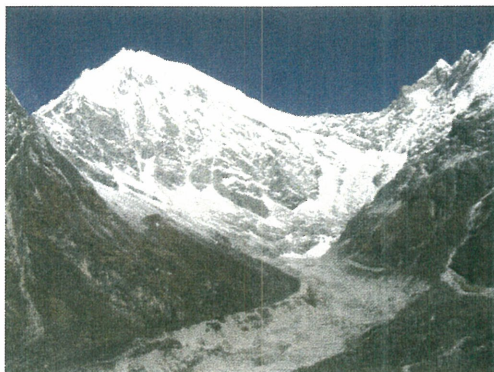
ヤラピークからの鳥瞰



今回の最奥点。モリトBCより2時間



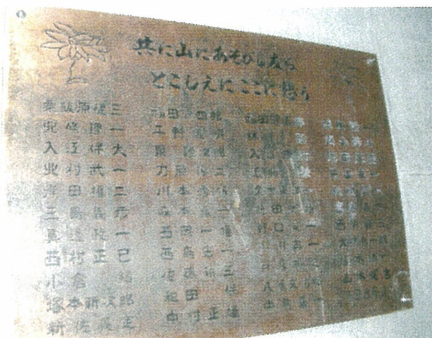
カンジュソとホシゲンドブツ



ランタン・リルン



ランタン村の銅板



駒ヶ根の銅板

編集を終えて

会報45号をお届けします。

今号から編集長 奥田 寛、編集員 佐々木惣四郎、上田忠士、佐藤一良、山田裕敏の5名の陣容となりました。前編集者の八木信男さんには永らく編集から印刷・製本・発送に携わって頂き、その労を謝するとともに、発行コスト面も大変な Merit を頂いたことに厚く御礼申し上げます。

さて、今号は前号以降の山行報告を実行月日順に、加えて三島さん・鷺田さんへの追悼文と雪線10周年行事の報告と、この半年間の出来事を並べました。トレッキング報告はキャンプ途中のダニング・ Tentで、食後の話題として執筆者を決めたものです。初めての会報作りに梃子摺りしましたが何とか年内発行に漕ぎ着けました。

藤本さんのご尽力にて、PC 利用者には会報（ニュース）のバックナンバー全てが居ながらにして閲覧出来るようになりました。また、同氏の追悼文に三島さんの会報への寄稿歴も案内されておりまして、今般駒ヶ根山荘に移設された銅板に刻まれた43名の方々の略歴は会報上の故人の文章「銅板碑の人々」上/下にて知ることが出来ます。山荘は今年10周年を迎えましたが、この銅板設置により大正6年入学の栗飯原さんから数えて90年の当山岳会の歴史と山荘が名実ともに繋がったと感じました。

その雪線は久保田さん、中島さん、上田さん他のリードでスムーズに運営されています。多数の会員が利用する関係上、利用規定を定めています（同封）。規定文は事細かく記されていますが、要は我々普通の社会人であり山屋である人が施設を利用する場合に、自然に心がける行為を規定と言う Title で文章化したものです。この建物はヒュッテ雪線と呼称されていますように、建造の精神は山小屋です。時には予約せずとも山小屋を使うことも起こり得ます。その場合は当該利用者から関係者に然るべき配慮がなされるでしょう。会報を紐解けば、建築反対の意見もありました。それも、これも10年経てばもう時効です。来年は昭和50年卒以降の方々の山荘利用が増えるような新しい企画が出れば、と思っています。

現役藤井君の文章は多数のカラー写真を配した、山岳部のブログから引っ張ったものです。PCや携帯で現物をご覧下さい。当方も巻末にカラー写真をアルバム風にまとめました。ネパールのものは兵頭さんの2000枚の写真からの抜粋です。最後に執筆者各位には、ご多忙の所を充実した原稿を予定期日内にご送付頂き深謝申し上げます。（山田記）

（追記）今年度会費のお支払いが遅れている方には、ゆうちょ銀行の払込用紙を同封しています。宜しく願いいたします。

了